

1



\* 0 0 4 7 5 2 4 0 0 0 \*

0047524-000

276-592

学校体育と女性体育

小瀬峰洋・著

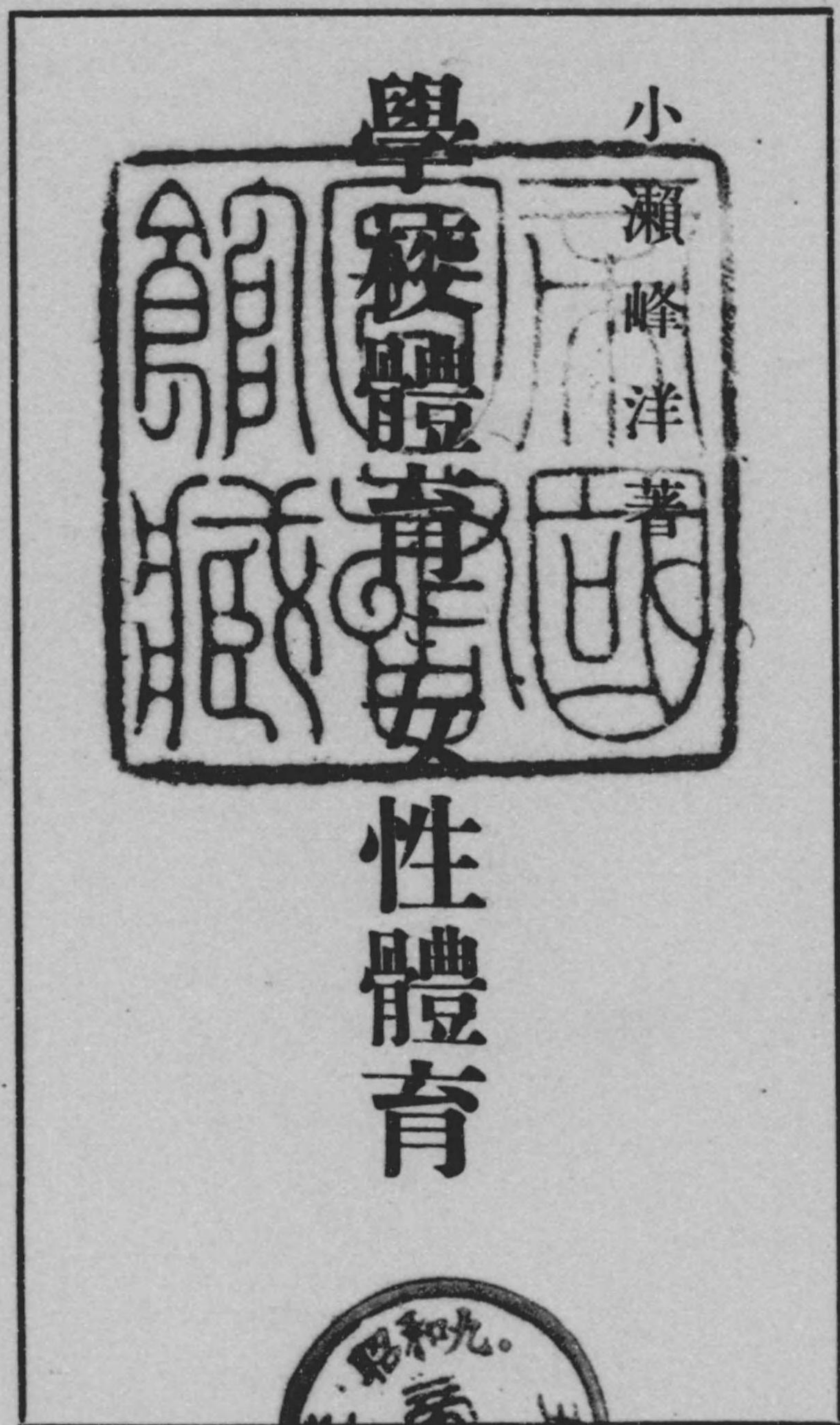
文書堂

昭和9

AHH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権  
第67条の規定に基づき、平成12年3月  
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

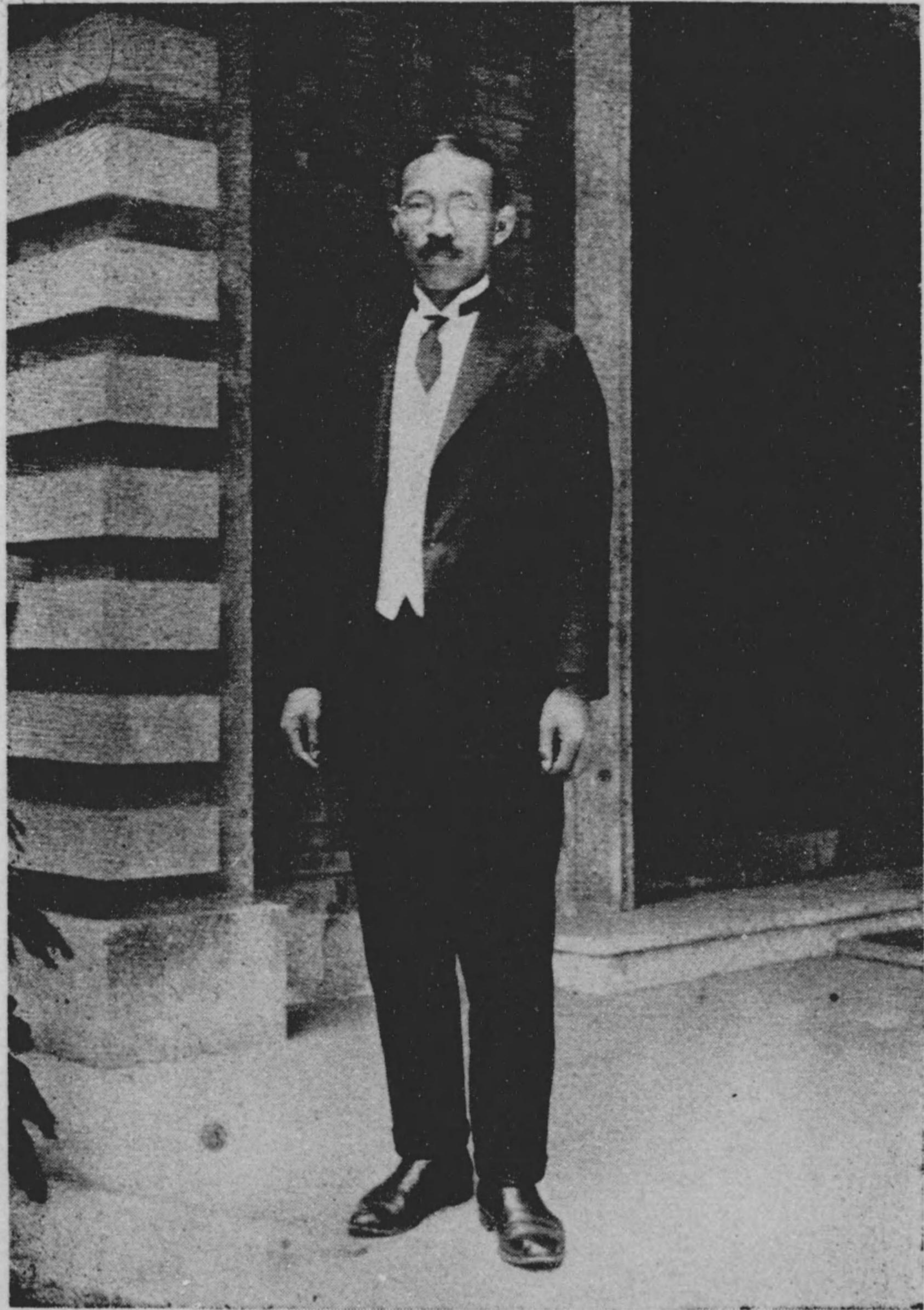
568



性體育



東 京  
文 書 堂 發 行



著者小肖



276-592

## 巻頭の辭

1

最近我が國の體育は非常な進歩を遂げたといふ。なる程國際競技によつて選手のレコードは年々高まつて行く。道行く女學生の身長はお母さんのそれより高い。野球試合のある度に球場は満員の盛況である。これ等の事實を基礎として、體育の向上を云々することは餘りにも早計である。國際選手のレコードが高くなつたとて、それは限られた極く一少部分の人達で、國民大衆の體育にさしたる關係がない。女學生の身長が高くなつたとて、これは外形のことで内臓諸器管の均齊を缺いた外形のみの發達は必ずしも喜ばしい事ではない。球場の満員これとて體育向上の一證事項とはならない。殊に人口増加に伴ふ死亡率、結核患者の増加率、これ等以前として低下しない所から考へても、體育の向上といふことは如何にも心もとない感じがする。

私の考へでは今日の體育は、その實行が一般化し、合理化しての向上ではなく、體育鑑賞家、いはば競技ファンが増加したといふことの方が妥當であると思ふ。勿論競技ファンの増加は、増加しないのに比べてよいといふ程度で、さして喜ぶべき今日の體育狀況ではない。

先年世界教育聯盟第三回教育會議がジュネーブに開かれた。その時日本を代表して衛生部會議に出席された現體育研究所技師醫學博士吉田章信先生が御歸朝の後、同文書院より「歐米體育の新研究」なる一書を出版され、私はその一本の御惠送にあづかつた。今その序文の一節を拜借して次に掲げる。

「體育の合理的に發達せる英米獨の諸國に於て、近年急速度に國民の結核死亡率を減じて、我が國民の夫れの二分の一位になつてゐるに拘らず、我が成績は少しも減少の傾向を示さない。この一事を以て見ても、最近スポーツ界の録から一年と顯著な發達を遂げたとは云へ、我が國の體育に

一大缺陷ありとなすものである。これ結核こそは體育の自覺並にその産物たる體育の向上とにより無條件に防ぎ得るからである。」又

「天性優れた資質を有する者は、機會さへ與へてやれば自然に獨力で伸びるものである。この伸び行く有様を眺めることは愈快であり容易である。しかしこの競技會の伸び行く寵兒を愉快に眺めて體育を簡單にフワン氣分で片附られては體育こそ迷惑である。

國民中には強い者もあるが、一面に種々な原因で弱い者が多いに拘らず、之等を強めることは實に容易でない。文明は益々此の者を急速的に増やす。水灑ぐ者は安閑としては居られない。教へ子には公平な體育を受けさせて強さを伸ばし、弱さを育む爲めに遺漏なき者でなくては眞の教育家とはいへない。」と

果して現在の初等教育者並に指導の任に當りつゝある者に、以上のやうな

覺悟と用意があるであらうか。遺憾ながら極めて少數の人以外にはかやうな人を望めない。太陽の光は萬人を公平に照し、大氣は萬物に平等である。この太陽、この大氣のやうな體育であらねば眞の體育は向上しない。現時の如く強き者を益々強く、弱き者は棄て、省みないといふやうな體育の行はれてゐる限り國民の健康を増進することは不可能である。

私が拙いながらもこの書を公にする所以のものは學校兒童、生徒、特に一般女性に妥當なる體育の行はれんことを希ふ誠意に外ならないのである。

昭和九年四月

輕井澤の寓居にて

著 者 識

小瀨峰洋著作年譜

(昭和九年一月現在)

書 名	年 度	定 價	發 行 所
一、學校舞踊三十四講	大正十四年	二〇〇 <sup>円</sup>	厚生閣
一、最新合理的小學校體育	大正十五年	三・四〇	厚生閣
一、小學校體操教材配當と指導案	大正十五年	一・二〇	啓文社
一、兒童體力、競技審査と體育問題	昭和二年	二〇〇	教育出版社
一、動作遊戯と競争遊技	昭和二年	二〇〇	教文書院
一、體育ダンス教材集第一輯	昭和二年	一〇〇	研究所

2

一、陸上競技法	昭和三年	一・五〇	教文書院
一、體育ダンス教材集第二輯	昭和三年	一・二〇	研究所
一、籠球競技法	昭和四年	一・五〇	教文書院
一、體育ダンス教材集第三輯	昭和四年	〇・七〇	研究所
一、體育ダンス教材集第四輯	昭和五年	二・〇〇	研究所
一、小學校學年別體育と衛生指導	昭和六年	二・〇〇	郁文書院
一、體育ダンス教材集第五輯	昭和六年	一・二〇	研究所
一、體育ダンス教材集第六輯	昭和七年	一・〇〇	研究所
一、 <small>小學校に於ける</small> 體育ダンス教授指針	近刊		

目次

第一章 我が初等教育界の現状	一
第二章 學校體育の現状	七
第三章 憂ふべき學校體育の諸相	一〇
新思潮の禍……體育範圍の無意識……教育上に於ける體育の位置を誤る……體育の目的を明瞭に意識しておらぬ……各教材の特質究明の不足……教育の對象についての顧慮が足らぬ……環境に關する顧慮の不足……絶えず正しく普くを目標として	
第四章 喜ぶべき學校體育の諸相	六三
個性の尊重……女子體育の尊重……科學的深化……本質の究明……體	



育の民衆化

第五章 女子の使命…………… 九

産兒……子女の哺育……内助……最後の言葉

第六章 女性の體育…………… 一〇六

女性體育の眞使命……社會生活上より見て……生物學上より見て……

遺傳學上より見て……心意方面より見て……生理解剖上より見て……

女性活動の上より見て

第七章 今後に残されてゐる諸問題…………… 一三三

以上

# 學校體育と女性體育

小瀬 峰 洋 著



我が初等教育界の現状

我が國の初等教育界、殊に初等教育界は何事によらず目新しい事柄に氣移りするといふ特別な傾向を多分に持つてゐる。何か少しでも變つた事があれば直ちに之を實際に於ては、進歩の階梯として、皮相な而も狭い主觀にとらはれて彼此と騒ぐ。よし實際に取入れなくとも大發明、大發見乃至は神の御聲の如く景仰禮讃を惜氣もなくする。新しき事を求めることは何事に於ても、進歩の階梯として極めて大切なことではあるが、いやしくも教育事業、殊に初等教育界にあつては、その被

第一章 我が初等教育界の現状

教育者に影響することは意想外に大なることを考ふるならば、新らしきを求めると共に、常に先輩の永き而も尊き足蹟を振り返つて考へねばならぬ。

かく考ふる時、現時の教育者の總べてが、果してかゝる用意の持ち合せがあるであらうか。教師本位の教育が正道でない。眞の教育は、兒童自らの學習に依らねばならぬといへば、直ぐ教へることを罪惡視して、一時間中學足捕りの討論に浮身を消させ、その極は、兒童の決議によつて教師の辭任勸告とやらまで乗出させて後悔した教師さへ出來た。

話は少し逆るが、彼の分團式的教育法が關西の一角に唱へ出されると、猫も杓子も、只一度の參觀や、只一度の理論概念を聞いたゞけで、直ぐ机の排列を變へたり、分團組織をしたりして、分團教授でなければ教授法でないかの如く考へ、又口にする。

一方自由教育が唱へられると、自由の意義すら解らずに、似て非なる放任放縱の教育を敢えてし、これが天晴新教育法であると任じてゐるのも束の間、ダルトンプランが唱導されると、自校の歴史的環境を無視し、何等の設備、手段、方法も講じないで自學研究を勵

行する。

その他曰くプロジェクトメソウド、曰く作業教育、曰く藝術教育、曰く何々と、滔々流れ出る新教育法、乃至は智能測定、體力測定と、駭々と進み行く新理論、新傾向を追ふに日も足りないといふのが我が現時の教育界、殊に初等教育界の現状である。

而して斯く走馬燈の如く、寸隙だに見ることの出來ない現時の我が教育界の傾向が、實際教育上如何なる効果をもたらすか、日常の仕事に如何なる蹉跌を生ずるかなどの顧慮は全く省みる所でない。變つてゐるが故に、奇抜なるが故に有難がるのである。何でも自分達が今日までやり來つた事と異つてさへゐればよい。世間普通の學校でやつてゐることゝ變つてさへゐればよいので、現在の學校の事情が如何にあらうと、兒童の環境がどうあらうと、乃至はその結果なり、過程なりの教育的價値の顧慮などは一尙問題でない。斯く變つた説を唱へ、變つた事をやつてゐる學校が、新しい學校とか、新人がゐるとかあがめられてゐる今日の教育界の實況は、誠に淺はかな、そしておはづかしいことではあるまい

か。靜かに現時の教育界を通して、そこに日々育まれてゐる子供達の上を省みる時、私は餘りにも苦々しさに歎息を漏さずにはゐられない。かく申すと筆者を枯木のやうな時代遅れの人間であると考へられるであらうが、而し必ずしも左様ではない。

後より後よりと流れ出る新理論、新傾向、新論説、それ等の中には、必ずや來るべき我が國の教育界に、或は何等かの効果を産み出すであらうことは確信し得るも、一面それ等が捲き起しつゝある悪波亂、悪影響、誤つた展開、邪道に陥つた實際を餘りにも多くまのあたりに見せつけられつゝあるのではあるまいか。

なぜ自分達が、否、吾々の先輩が、今日まで孜々として努めて來たことに價値を認め得ないであらうか、一生懸命に歩いて來た道、その自分達の尊い生命の足跡に、なぜ愛着と敬意とをもち得ないで、むざ／＼と振りすて、行くのであらうか、なぜ傳統の尊さを堂々と主張し得ないで、過去の歴史的生命を惜氣もなく悉く蔑視するのであらうか。

全く我が國の教育界殊に初等教育界は、變轉出沒極りなき新主張に、目まぐるしくもな

やましい程の思がする。こんな状態で何時、何人の手によつて、眞にして正なる教育を生み出し得るであらうか、吾々人類の生存する限り、否、教育の存続する限り、洋の東西を問はず、新理論、新傾向、新諸説は續々と現れ出るであらう。又出ることが進歩の一階梯である以上、大いに歓迎する必要もあらう。

而しながら、吾々は新理論、新傾向、新諸説の前には、一個の忠實たる學徒であると同時に、教師として、それ等が現在の兒童に即するか、教材に即するか、更に自己の力に即するかを考へねばならぬ。

大局高所に立つて、國家の前途の爲に、兒童の爲に、新しきに魁することなく、去りとて古きを墨守することなく、よく中庸の教育道を建設して、萬石の堅き根底を築くべく百尺竿頭一步を進むべきであると思ふ。而らざれば世の心ある人達によつて、教育者は研究の美名に隠れて新奇を競ふ輕薄なる輩の集りであると蔑視されるであらう。教育は上りの輕薄なものであつてはならぬ。どこまでも地味に一步一步進むことに心すべきであるの

に最近の趨勢は、一躍して彼岸に達せんとする所に大なる支障と盾循がある。

## 第二章 學校體育の現状

我が國に於て學校體操を制定し、必修教科に加へて國民體位を高めやうと企て、からは可なりの長い歴史を持つてゐる。この歴史をたどつて國民の體位がどれ程向上したかを一瞥するに、左程著しい効果を認めることは出来ないやうである。勿論効果が皆無であるとは言ひ得ない迄も、その効果たるや極めて微々たるものゝやうである。元より學校體育は、學校教育の範圍内にある仕事であるから、單に肉體ばかりの問題でなく、精神方面にも大なる交渉を持つてゐる筈である。何れにしても國民生活を營爲する各個人の體位には、今少し影響を與ふる筈である。尙又精神方面の影響を見るに、之又何等その特徴を擧げることが出来ない、學校體育を施行するに當つての、その主義方針としては、目的論に於ても、方法論に於ても實に立派なものであるが、その實績に至つては、肉體、精神兩方面共に、その影響を受くること、極めて微々たる所以のものは、その原因果して那邊に

あるであらうか。

從來我が國の教育は、物質文明の影響を受けて、功利的價值にのみ重きをおき、その結果、間接に人間を養ふ知的教科に偏して、何事も主知的、分拆的、末梢的に進んで、知識を蓄へるとか、技術を進めるとかいふことに主力を注ぎ、直接人間を養ふ、情意的教科を等閑にして、道徳的、身體的、調齊的、乃至は藝術的教育の先行綜合として、最も有力な手段である體育を輕視し、他教科と同一律の價値を考ふるは愚、あたかも知的教科の附屬物の如く考へて來たことは、何人も首肯し得ると思ふ。

殊に初等教育に於ける體育は、體育それ自身の獨自性より考ふるも、又全教育上から見た普遍性から考へても、體育手段としての運動形式から考へても、總べての體育の規準であり、又規準となすべきもので、次第に上級學校に進むにつれて、その内容形式を伸展擴充せしむべきであるのに、今日の狀況は全く之れに反して、上級學校に於ける體育手段の外形を模倣追従するに日も足りない有様である。のみならず體育本來の綜合的立場は全く

破壊されて、枝葉末節に奔り、只單に體育の手段である運動が個々に分離された形によつて行はれ、體育の眞生命が那邊にあるか分明し得ないといふのが今日の學校體育の現状である。

ことごとくに至つたのは、果して何人の罪であらうか。種々なる原因が綜合混一しての結果であることはいふまでもない。制度の缺陷、時代思潮の禍、これ等は勿論重大なる關係を有するであらう。而してそれ以上直接の影響を與へてゐるものは、思想的に洗練されず、單に身體が健全であるとか、一部分の技術に長じてゐるとかを以て、一かどの體育家として自らも任じ、他も許してゐた從來の體操教師と、初等教育の實際に従事する教育者、並に之等の指導監督の任にあたる者の不用意なる結果が今日の狀況を招來したのである。

第三章 憂ふべき學校體育の諸相

前章に於て、我が學校體育の現状についてその概觀を記述した。而して更に詳細に學校體育の現状につきて考察する時、いくつかの憂ふべき事項のあることを何人も氣づくであらう。

新思潮の禍、現時の我が教育界は、何事によらず新しきが故に、珍しきが故に、奇抜なるが故に前後の考へもなく、それに氣を奪はれるといふ特殊な病弊を多分に持つてゐることは暫々述べた通りである。この結果が、一つの新思潮、新傾向、新説が擡頭すれば、教科の本質を詮議することなしに、直ちにそれをどの教科にでも當て箴めやうとするから、常にそこに無理があり、弊害が起る。

例へば或新主義の教授法が算術科に好適であるからといつて、その方法をそのまま體操科の授業に當て箴めることが必ずしも有利ではない。勿論無理に當て箴めれば、當て箴め

られないことはなくとも、當て箴めることによつて、體操科の目的を達成するものではなく、時には大なる弊害を生ずる。殊に研究の淺い、而も經驗に乏しい輩が斯かる眞似事をした場合には、鵝の眞似する鳥以上に、はたの眼からは滑稽でもあり、可憐でもある。

最近兒童の個性尊重に伴つて、兒童本意とか、兒童中心とかいふ教授法が高潮されて來たことは、教育の一步進として喜ぶべきことではあるが、而しこの主義の教授法を行ふには、先づそのよつて來たる根本精神と各教科の本質とを考へ、かゝる方法によつて或る教科を進めて行くことが、兒童の爲めに果して有利なるか否か、又教師自身の力が、これを消化し運用するだけの要素を有するか否かを十分考究する必要がある。而るに世の中には氣の早い移り氣の輩が多分にあつて、吾こそ魁の功名を立てやうとして新主義に基く體操科の取扱ひに及々とした結果、兒童に「何でも好きな運動をせよ」と命じて、教師は體操時間中袖手傍觀してゐる自由主義取扱ひや、兒童に自習の方法も、自學により兒童各自の到達すべき目標の指示もなく、自學自習に必要な何等の設備の用意もなしに行はれる自

學自習の取扱ひや、乃至は兒童の身體的能力の調査も、精神活動の程度も調べずに只漫然と行ふ個別的とか、自覺的とかいふ美名のもとに隠れて行はれる取扱ひがあるかと思へば、事更に新思潮の禍を怖れて劃一的取扱ひをなす向も少くない。

體育範圍の無意識。體育そのものは、人間の身體並に精神の庇護と鍛練とを密接不離の關係に保ち、且つ榮養を十分に與ふることによつてその目的を達することが出来るのである。

例へばこゝに重症患者があるとして、それに醫師が絶對安靜を保たしめることは庇護である。而して幾日かを経たる後、その容態によつて患者を仰臥から側臥へ換へ、更に上體を支持して起し、更に進んで直立させ、やがては杖によつて歩行させるといふことになる。これは即ち一種の鍛練で、その間常に榮養を十分ならしめることの必要はいふまでもない。斯の如く病人と雖も庇護と相俟つて一種の鍛練が必要であり、これに伴ふ榮養が必要である。健康人の鍛練は、一層その度の進んだものであるから、庇護も榮養も相當顧慮

しなければならぬ。

而るに現在の學校に於ては設備の不完全なのを口實として、庇護に屬する消極方面の體育並に榮養方面に關しては甚だしい缺陷だらけである。

いやしくも體育を實行し、又實行を指導せんとする者は、積極方面の體育即ち鍛練と、消極方面の體育即ち庇護とが體育の範圍内にあることを忘れてはならぬ。この二方面は個々に分離して、別々の方面に進むものではなく、鍛練の中に庇護あり、庇護の中に鍛練があつて、相互扶助によつて體育の目的を達し得るのである。従つて何れかの一方に偏する時は、體育の目的に反するのみならず、往々危害を招くことのあるのは、事實が雄辯に證明しておる。

而るに現今の實狀は、體育の範圍を意識せず、眞に體育の意義が理解されてゐない爲か、それとも消極方面の體育即ち庇護に關する學校衛生方面の設備極めて不完全なる爲か、前述の如く、この方面に屬する校舎内外の清潔、教室内に於ける學習の姿勢、換氣、

温度、濕度、採光等の調査は勿論、食事、休息、睡眠、入浴その他内外的疾患に対する救急處置についての研究並に實施に至りては等閑視するも甚だしい。積極方面のみが體育の如く考へられてゐると思はれるやうな實狀は決して少くない。事實かく考へてゐる人は相當多數である。

かくして單に一部の兒童に特別なる積極運動の練習を強ひ、各種の競技會に名譽の奴隷となることを知つて、自校の便所や、運動場や、教室の塵芥がどうあらうと、教授時間中の衛生状態がどうあらうと、病弱兒童の取扱ひの如き全く念頭にないといふ有様である。今後の學校體育に於ては勿論積極的な體育運動の必要はいふまでもないが、教師、父兄、校醫は一體となつて消極方面の體育思想を普及し實行せしめねばならぬ。

教育上<sup>に</sup>於<sup>ける</sup>體<sup>育</sup>の<sup>位</sup>置<sup>を</sup>誤<sup>る</sup>。由來吾々は教育を、知育、德育、體育の三部分にして考へてゐる。これは唯教育なるものを研究し、取扱つて行く方法上の便宜に過ぎないので、かく判然と三部に分れてゐるものでもなく、又強いて分けるべきものでもない。若し

教育を、一圓周と假定するならば、知育、德育、體育は、一圓周を形造る所の部分、即ち弧であつて、圓周の全體ではない。即ち各部分としての相互が、一元的の圓周に歸する所に教育の眞意義があるので、教育の一部分をなす知育なり、德育なり、體育なりの一つを以て教育の全體となすことは大なる誤りである。

尙又この三部分の各々は、純然たる單一的な、一元的部分ではなく、教育への共同、相互扶助の務を負擔する部分である。換言すれば、この三部分は教育への過程であつて、相互に扶助提携すべきもので、若し三部分の一部分を輕んじても、又過重視しても、それは眞の教育へ到達することは不可能となるのである。

尙又知育、德育、體育の三部分を、各一元的に考へて、その各々が一圓を形成すると假定して、三圓を一點に於て交らしむるならば、その交叉點、と相互に交錯する部分と、全く交錯しない部分との三つに分れる、この場合に於て、三部分の各々が全く交錯しない部分は、即ち各特殊な任務を以てゐる部分で、それ自身が一元的に、知育なり、德育なり、



體育なりの獨自性を發揮する部分である。而して此の三部分がなす各圓が、一交點即ち教育の核心に觸れんとする時、相互に交錯する部分を生ずる、これが相互扶助をなす普遍性の活動範圍と見ることが出来る。かく教育に於ける知育なり、德育なり、體育なりは各々一元的に獨自性を發揮すると共に、教育の核心に觸れんとすれば、どうしても他の部分と相互に扶助し合ふ普遍性の力に俟たねばならぬ。即ち部分としての相互が圓と言ふ一元に歸一する所に、始めてその使命を果し得るのである。換言すれば、教育に於ける知育なり、德育なり、體育なりは、相互に扶助し合ひ、提携することに於て、始めて各それ自體の目的を達成すると共に、教育の本義に到達し得るのである。吾々は得て眼界の狭いのと、研究の淺いのに加へて、生來の好惡や、得手不得手が手傳つて、偏狹な主觀にとらはれ、誤つた獨斷に陥り易く、或る者は分拆的な而も末梢的な部分を擴大し過ぎる結果、それ等が綜合への過程であることも、やがては組立てられて全體となることも忘れ、或る者は漠然と全體を眺めて、それを構成する部分を忘れ勝ちである。

明治維新以來一般に物質文化に眩惑されて、知育が教育の全部であるかの如く考へ、甚だしきに至つては、算術が知育の全部であるかの如く考へ、明けても暮れても算術一天張り、教師本位につけた點の上り下りを見て、我が校の教育は進歩したと悦んでみたり、悲しんでみたりする様な校長さへあるやうになつた。或は德育の第一手段は訓練にあると考へ、訓練は一から十まで杓子定規にやることだと、とんだ獨斷のもとに終日幼兒をとらへ、軍隊式にやつてゐる學校も出來た。これ等は、何れも教育とその部分をなす知育、德育、體育の關係を意識しない結果である。最近物質文化の反影か、果又世界的潮流の御蔭か、それとも眞に國民の自覺に基くかは別問題として、何れにもせよ體育熱の向上したことは慶ぶべきことではあるが、それにつれても教育上に於ける體育の位置を確實に意識して居ない人達の多いには驚かされる。相等見識もありそうに見え、而も社會の體育リーダーとして立つ様な人にさへ、教育の全體と部分とを見誤つて、體育即教育といふやうな、體育と教育とは名稱の異つた同一内容を有するものであるかの如く、過重視してゐること

は將來の爲に憂ふべきことである。

吾々は教育者として、今後の體育指導には、體育をどこまでも教育の一部分で全體でないことを意識し、體育は體育として一元的に獨自性を發揮する一面、他の知育なり、徳育なりと相互に扶助し合ひ、提携し合ふ所の普遍性の力と相まつてこそ、眞に教育上に於ける體育の眞使命を果すことが出来るのである。従つて、常に體育といふ部分を考へながら、それが他の部分と相俟つて総合的に構成する教育を凝視して進まねばならぬ。而らざれば吾々の努力は、個人の爲にも、國家の爲にも徒勞であるか、又は有害に終るであらう。體育の目的を明瞭に意識しておらぬ、體育の目的を明瞭に意識し、確實に把握しないで、自己の好き好みによつて、極限された小範圍に立籠り、獨斷的な而も偏した見解のもとに、體育を行はんとする傾向を最近多分に認めることが出来る。

一部の輩は、體育即心育といふ様な見解から訓練本育に體育を行はんとする結果、教練萬能主義に取扱い、或は科學そのものを餘りに過重視して、総合的な人間教育を離れ、人

間そのものを一個の機械視して取扱ふ、解剖主義、或は生理主義の取扱ひ、或は體操科は技能教科であるといふ立場から、體育の一手段として行ふ運動の技術さへ上達すれば目的を達すると考へる技術主義取扱ひや、體育の本質は愛であるから教師と兒童とが一體となつて、無我の境地に活動することが體育の至境であるから、體育は一つの藝術であると斷定して行ふ藝術主義、乃至は限られた一部選手の他校との競技に依つて得た優勝旗や、勝盃を數多く並べて隨喜の涙を流す選手主義や氣分主義がある。而し體育の目的は左様に簡易な、輕々しいものではない。次にその大要を述べる。

學校教育に取り行はるゝ教科を大別すると、情意的方面に屬する教科と、知的方面に屬する教科との二つに別けることが出来る。情意的方面に屬する教科は、直接人間そのものを養ふ教科で、知的方面に屬する教科は、直接人間の智識を増し、その結果間接に人間を幸福に導かんとする教科であるといひ得る。

明治維新以來、我が國は西洋文化の皮相なる影響を受けて、功利主義に偏し、所謂知的

教育を過重した教育が行はれ、單に智識を蓄積するとか、技術を進めるとかいふことに全力を集注し、直接人間そのものを啓培する情意的教科を著しく等閑に附して來た。

知的功利的教育の弊は、何事にも主知的、分析的、末梢的に進んで、綜合的、統一的、人間的教育手段としての、情意的教科である體育を輕視して、それが恰も文化的、知的教科の附屬物であり、走狗であるかの如く考へ、體育本來の目的は無視され、誤れる邪道へと進んだ。

斯の如き今日の状態を作り出した罪は、勿論功利的な惡思想の結果であることはいふまでもないが、その大半は所謂從來の體育専門家といふ技術家が負はねばならぬ。彼等の多くは殆ど思想的に洗練されてゐなかつた。彼等の文化人としての地位は低かつた。頭腦が悪かつた。教育上に於ける體育の目的が明瞭に彼等の頭に意識されてゐなかつた。唯身體の健康なるもの、技術の若干秀でてゐる者は立派な體育専門家としての地位を得、世人も亦これを認容した。彼等は自分の偏狹な修養の小範圍に立て籠り、誤つた體育觀のもとに

議論を進めて、遂に初等教育界にまでその累を及ぼした。教育界の人々も、彼等が専門家といふ立場にあるの故を以て、彼等の説をまともに受け入れ、何等の批判も考察もなく實行へと進んだ。茲に一部の輩は教練萬能主義を高唱して軍事教育の具に供せんとし、或る者は技術主義を唱へて輕業師の如きを以て理想とし、或る者は科學を過重視して人間を一個の機械の如く考へ、能率の向上を主眼として能率主義を謳歌し、實利主義の踏臺に供するもの、或る者は氣分本位に考へて、選手主義、享樂主義の具に供するを以て自他共に不思議を感じるものがなくなつた。更に眼を轉する時は、極端なる鍛練主義もあれば、藝術主義もある。かくして體育は體育本來の綜合的立場を離れ、人間教育を離れて進んだ結果、それ等の殆どが體育の使命を果すはおろか、或は行詰り、或は無價値のものゝ如く考へられるに至つた事は當然の歸結で何等不審とするに足らない。

吾々教育者は一刻も速に醒めねばならぬ。専門家の説なるが故に盲從してはならぬ。教育上に於ける體育の位置を明瞭に意識して、それに向つて邁進せねばならぬ。

而らば體育の目的を那邊におくか、精神のみでもない。身體のみでもない、所謂人間的健全を期するにある。

人間的健全を期することは教育の目的で、體育は暫々前述した通り教育の一部分を負擔するものであるから、體育のみによつて人間的健全を期し得るものではなく、他の知育なり、徳育なりが教育の核心に觸れんとする所に、體育と交渉し、接觸し、相互に扶助し提携することによつて、その目的を達成し得ることは所謂教育の全體と部分の關係に外ならない。古來唯物一元論を唱へる學者は、人間の肉體が出来て後精神が出来たといひ、唯心一元論を唱へる學者は、精神が先で肉體が後だといひ、或は心身同時に出来たといふ、心身一元論者もあるが、これ等の哲學的論究は別として、極く通俗的に考へるならば、心身發成の前後は何れにもせよ、身體的健全と精神的健全との二つを人間的健全といふことが出来ると思ふ。今この人間的健全、即ち身體的健全と精神的健全に關し、教育といふ範圍に立つて、體育が主として果すべき使命を擧げるならば次の様である。

身體的健全といふことには、生存力の向上といふこと、運動能力の向上といふ二方面があり、精神的健全には道德的能力の向上と知的能力の向上とを考へねばならぬ。

生存力の向上 凡そ地球上に存在するもので、生命を有するもの、即ち生物と名のつくものは、何れも自己の生命を存続するは勿論、自己の種族の繁殖と存続の永遠を圖らんとする本能がある。この本能の現れが生存力であつて、この本能は總べての生物の通有性で、その生物の範圍内にある人類は、他の生物の何れよりも、この生存力を保持せやうとする強い意識を持つてゐる。

生存力を保持する爲には、形態的に身體各部の構造が均齊なる發育を遂げることが必要であり、各部の構造が均齊なる發育を遂げることは、やがて消化系統、呼吸系統、循環系統、排泄系統の機能を生理的に向上することである。つまり生物としてはその種類に依つて、程度の相異こそあれ、何れも生きて行くために、なくてはならないものはこの生存力である。

従つて人類殊に文化人は、他の何れのものよりも生存力を旺盛にせやう、そして出來得る限り、永遠に保ちたいといふ願ひは、一層強くあり眞劍である。その生存力向上の爲に有力なる人爲的手段を求めるならば、それは體育に俟たねばならぬ。

運動能力の向上、生物はその生存力を保持する基礎的條件として自體を營爲する爲に、榮養物を採らねばならぬ。食はねばならぬ。天然の恩惠的物質を得て、自由に食ひ得る植物は別として、他の生物即ち動物は、食ふ物が十分でないだけに、食を得るためには烈しい競争をなさねばならぬ。その競争が激げしければ激しいだけ、その競争に打ち勝つだけの、動きのとれる體をもたねばならぬ。

勿論動くといふことは、動物以外の機械でも動く。而して器械の動きは物理的法則によつて動くもので、その動きは計測することは容易であるが、動物の生きんが爲めに、同種の種を残さんが爲めに、食はんとして動く動きは、猛烈であり、眞劍であり、時に盛衰がある。従つてその動きを計測することは不可能である。個性によつて動き得る限りを動

く。この動きの力の大切なことは動物のすべてに共通である以上、動物の範囲内にある人は、更に他の動物よりも、將來共存共榮の上に一步を進めやうといふ強い理想を以て動く。この理想を持つて動くことが、他の動物の動きと異なる點で、これが即ち働きである。故に働く爲に運動能力の向上といふことは、その根本條件として大切なことはいふまでもなす。

運動能力を向上するには、解剖的方面より見て、身體各部の構造が均齊なる發育を遂げ、生理的方面より見て、内臓器管及び運動器管の機能が向上し、心理的方面より見て、それ等の機能を統整する神経系統の向上に俟たねばならぬ。換言すれば、人間の身體的構造と内的機能の調和した發達によつて生ずる體力の向上に俟たねばならぬ。その體力の向上は、先天的素質を基礎として、積極消極兩方面の周到なる注意に基く不斷の體育に俟つより外にないのである。

かくして、體力向上の結果、世界に比なき大選手となつて、圓盤を二百米投げこも、汽

車の走りに劣らない走力があつても、萬年の齡を保つても、そのみで體育の目的を達し得たとはいはれない。何故ならば、人類殊に文明人は、自他共に道德律によつて活き、更に現在の社會生活様式をよりよくせんとする理想即ち道德的能力なり、知的能力なりが缺けてゐるならば、人間としての尊貴がなく、他の動物と隔りの少ないものとなる。人間は身體的健全を全ふする爲めに生存力を増し、運動能力を向上しやうと努め、一方精神的健全を圖つて、永く強く、而も道德生活を續けて、よりよき幸福な自己をつくり、よりよき幸福な社會を形づくらんとする理想があればこそ人間としての尊貴があるのである。

而らば精神的健全とは如何なることを意味するのであらうか。今便宜上精神的健全を説くに當つて二つにわけらる。

道德的能力の向上 人間は人間としての道德的生活をすることが萬物の靈長として尊貴な所以で、若し人間の生活から道德的生活を取除いたならば、如何に角力取り以上に體が強大になつても、汽車や電車のやうな走力があつても、飛行機の如く空中をかけ廻ること

が出来ても、總の齡を保つても、それは何等の價値がないばかりでなく、時に有害であり危険である。

健康は人間としての道德的生活を営む有力な一基礎條件で、各個人が健康であれば他人に迷惑をかけることが少い。尙又身體的能力の如何が共同生活をなす社會人として、社會に密接な關係を有し、身體的能力の優れてゐることが、どれ程社會にとつて有利であるかもしれない。こう考へると廣い意味に於て、健康な事や、運動能力の優れてゐることは立派な徳性と見做すことが出来る。

更に道德的陶冶を狹義に考へるならば、道德的感情、徳道的知識、道德的意志等によつて行爲が生れ、その行爲を道德的に實行するやう指導することが訓練で、その訓練をなすことが體育の分擔する道德的能力の養成である。

吾々が日常指導しつゝある兒童に、共同とか、努力とか、機敏とか、遵法とかいふ道德的知識を授けることは、修身科に於ても又國語科に於ても、乃至はその他の所謂知的教科

の例話説話によつてその字義を理解させ、感激させることは左程困難ではない。而し吾々の教育は字義を理解させ、感激せしむる程度の事が目的ではなく、實踐窮行の人をつくることである。その實行體驗によつて始めて、その眞意義を體得することが出来るので、その體得は體育の一手段として行ふ遊戯、競技を課する場合が、他の教科の何れの場合よりも有効であることは何人も經驗してあることである。

知的能力の向上、精神的健全を期するには、知的能力の向上といふことが主要なる要件であることを見逃すわけにはいかない。吾々は知的能力を向上する上に、病身であり、病身でなくとも虚弱であるならば、それによりて受ける損失の大なることは豫測するに難くない。従つて健康は、自身の知的能力を向上する基礎的條件である。而るに従來の教育者は此の基礎的條件である健康の増進といふことを等閑にして、唯知識の蓄積に努力し、甚しきば健康を破壊してまで、知識を得させやう、蓄へさせやうといふ暴舉を企てたが、事意の如くならず、知的能力の向上が鈍いと嘆いたのは餘りにも淺見であるといふ謗をのが

れるわけにはゆくまい。

尙又知的能力向上の基礎的心理作用としての注意力、觀察力、思考力は體育によつて十分養ひ得るにもかゝらず、その根本的手段を放棄してゐながら、唯注意力が足りないの、觀察力が粗漏だの、思考力が鈍いだのと、その罪の全部を被教育者に背負はせて平氣であつた。教師の中には體育が、教育上如何なる目的を有し、如何なる部分の使命を果すものかについての研究が足りない者が多分にあつた。最後に知的能力の向上を圖る爲には、特殊な疾病、即ち近視とか亂視とか、或は鼻や耳の疾病を治療しなければならぬ。特殊な疾病に犯されながら、それに氣づかず治療を行はない爲に思はぬ禍を受けてゐるのは決して少くない。世間にはたゞぼんやりしてゐて、やれ算術が出来ないの、國語が出来ないの、記憶力が鈍いといつてゐたのに、偶然にもその兒童が特殊な疾病に犯されてゐることを發見し、治療に手をつくした結果、知的機能がめき／＼向上したばかりでなく、日常の行爲の上にさへ著しい良結果を得たといふ例はいくらもある。こうした點から考へても

消極的體育が如何に知的能力向上の上に重大なる關係を有するか、明瞭である。

人間の身體的及び精神的健全を期することが、即ち人間の健全を期する所以であり、その人間的健全を期する手段として、教育上體育の分擔する範圍は大體以上のやうである。

元より體育の負擔する範圍に於ても主として、積極方面の體育に依る場合と、消極方面の體育に依る場合とあることは勿論であるが、兩方面の體育は、個々に分離して別個の道を進むものではなく、相互に扶助し合ふことによつてその目的を達し得るのである。

各教材の特質究明の不足。體育の教材、即ち一手段として行ふ運動は、各その特質を持つてゐて、他のものによつて代用することの出来ない独自の生命がある。従つて各教材は相倚り相助けて、その目的を達し得るもので、一部教材の偏用は、決して體育の目的を達し得るものでなく、かへつて有害な場合が多い。従つて各教材の特質を精細に研究して、その足らざる所を相互に補ひ合ふことによつて、眞にその目的を達し得るのである。而るに現時の體育は、その各教材の特質が十分研究されてゐない結果、競技萬能とか、體操萬

能とか、舞踊萬能とかいふ偏した主義の體育が行はれてゐることは甚だ遺憾である。

前述の如く我が學校體育は此の點について十分なる準備も理解もなかつたことは、我が學校體育の變遷の跡を眺むれば、その邊の消息を雄辯に物語つてゐる。

我が國に於ては、明治十一年時の文部大輔田中不二麿氏に招かれて、米國アーマスト大學出身のドクターリーランド氏が獨逸體操の流れを傳へた。この時通譯の勞をとられたのが坪井玄道氏で、氏は通譯の傍ら體操を模倣し、記憶してリーランド氏の歸國後は、専らその方法の普及宣傳に努められた。かくして模倣より模倣への道を辿つて、體操は普及したが、そこに何等の科學的根據が無かつた。従つて模倣が上手であれば頭腦の素質が少々悪くても體操は出來た。そうして低腦に近い無智な者は體操教師になつた結果、體操は無智なもの、頭の悪いもの、録を食む道であるかの如く世間の人に考へられ輕視された。殊に偏知教育禮讚の極にある當時の人々には、體操なり、體育なりは一考だにされなかつた。眞に心ある者はその實狀を眺めて如何にしてか、體操なり、體育なりに何とか科學的



根據を得たい、その眞價を一般に理解させると共に教師の地位をも高めたいと悶いた。而しその學理的根據を見出すには、餘りに教師に體育の基礎的學科の力が貧弱であつた。かくの如き状態で歲月は流れた。大正の初葉に當つて時の九州醫科大學の櫻井博士は、體操につき解剖學の見地から一部の根據を公にされ、これが爲めに我が國の體操は隔世の進歩を遂げた。これはもとより櫻井博士一人の力ではないが、これにヒントを得て、學者も實際家も大いに研究を進めた。一方現體育研究所技師吉田博士は、一般體育運動に關し、生理學、衛生學的立場から、多年の蘊蓄を發表されて以來、我が國の體育界は非常なる緊張味を以て、敢然として合理的を眞向に翳して、眞に體育の使命を果すべく躍動して來た。而し體育學の殿堂には尙開かるべき心理學的根據といふ扉が以前としてそこに堅く閉されてゐることに氣づかないではなからうか、否氣づいてはゐるが、開くだけの力が足りないのであらうか、この心理學的扉を開くことが將來誰の手によつてなされるであらうか、この扉の開かれない限り、眞の體育へは進まない。

如上の如く科學的根據に立つて何等各教材の本質を究明しないで、たゞ目新しきが故に、珍しきが故に奇抜であるが故に、課した從來の各教材は轉々として遷り變つた。而も極く一部分に偏した教授が次から／＼と、止めどもなく行はれてゐる。即ち啞鈴體操—棍棒體操—球竿體操—柔軟體操—矯正術—美容術—行進遊戲—獨逸式徒手體操—瑞典式體操—競爭遊戲—唱歌遊戲—動作遊戲—表情遊戲—律動遊戲—動情遊戲—スクールダンス—重心遊戲—競技—ニールスブック式體操—舞踊等々、内容が同じであつても名稱が變れば隨喜の涎を垂らしてそれを眞似した如きは、何れも教材の本質を究明しない證據である。吾々は生命を維持し、身體の發育を圖る爲に、古來學者は人間の身體中に含有する物質と同じ物質、即ち炭素、水素、酸素、窒素、硫黃、クロール、ナトリウム、カリウム、カルシウム、マグネシウム、鐵、磷等の原素を含んだ食物が必要であるといつて居る。而しこれ等の原素が必要であるからとて、原素のそのまゝを與へても食物としての効果なく、これ等の原素が複雑な化合物をして蛋白質となり、脂肪となり、含水炭素となり、更に他の

鹽類及び水の五つが體內に入つた時、始めて榮養となるからこれ等の五つを榮養素といつておる。

これ等の蛋白質、脂肪、含水炭素、鹽類、水が榮養素であるからとて、これ等の一つ一つを循環的に採れば、他の榮養素を同時に採る必要はないか、又一度に總べての榮養素を食へるだけ食つておけば事足るか、それとも何れか一つを多量に採ればよいかといふに、若しかゝる事をするならば、榮養の目的を達し得ないばかりでなく、身體に障害を起すことはいふまでもない。如何なる榮養素であつても一種で他のすべてを充すことは出來ない。即ち各榮養素にはそれ〴〵の特質があるからである。従つて總べての榮養素を適當に採り得るやう混食し、而も周期的に過不足なく食物をとることが最も榮養の目的を達する所以である。

體育とその教材との關係は、恰も身體と榮養素との關係に於けるが如く、體育教材としての體操なり、教練なり（これには體育以外にも目的である）遊戯なり、競技なり、舞踊



なりには各その特質を持つて居て、それ等が相互扶助によつて體育の目的を達し得るもので、これ等の一つが如何に有効な教材であつても、そのみで他を代表し體育の目的を達成するが如きは望んでなし得ることではない。體操なり、競技なり、その他何れにもせよ、一教材を一定期間繼續するのは、榮養素を一種づゝ循環的に食ふのと同様であり、一時的に多くの教材を課して後に省みないのは、一時的大食ひの類であり、一教材を重視するのは、一榮養素をのみ喰ふのと同じで、こうした體育は肉體を破壊し、精神を害ふ以外に何物もない。

從來の我が學校體育は何れも此の種のものであつた。現時の學校體育界は競技に没頭し、その結果兒童、生徒の心身を日々に破壊しつゝあるといつても過言ではない。甚しきは幾多の春秋を残して空しく此の世を去つた所謂競技犠牲者は、世に現はれた數のみでも決して少くない。體育教材の有効なことを知りながらも、體育以外の事に利用し、或はその教材の特性發揮による相互扶助を忘れて、各教材の併用を誤れる多くの人々の爲めに、

體育界は今尙物好きの仕事、危険なる業として心ある人に呪はれ、子女の痛ましき最後を見送つた父兄達に悲しみの涙を更に新しくせしめつゝあることに一般はなぜ反省しないであらうか。彼の故人見氏が病中最後の手記として世間に公にされたものは、世間の多くの人々によりよき反省の資料となるであらう。

吾々教育者は一刻も速に醒めねばならぬ。體育の各教材について、その特質を凝視せねばならぬ。さうして實施の方法を誤つてはならぬ。他の目的に悪用してはならぬ。従つて一時間の體操教授に於ては勿論、他の場合に於ても一教材に偏することなく、各教材の特質を十分發揮せしめ、而もそれ等が渾然一體となつて眞に體育の目的に添ひ得る爲めの立案を考究しなければならぬ。その案の内容なり、形式なりが漸進的で、一時間より一週間へ、一週間より一ヶ月間へ、一ヶ月間より一學期間へ、一學期間より一學年間へ、一學年間より卒業まで、卒業より社會生活まで系統的に伸展する様な基礎をつくらねばならぬ。たゞ漫然と自己の好嫌や、世の流行乃至は誤つた主觀にとらはれて、各教材の特質を見失

つてはならぬ。過重視して偏した取扱ひをしてはならぬ。

殊に世の専門家は己の得意とする所を誇大する弊がある。例へば、體操より出来ない人は體操の提灯を持ち、遊戯のみやる人は遊戯萬能を説く。而しこれは一面止むを得ないことではあるが、體育界の爲めには心すべきことである。殊に初等教育に従事する者は、誇大された教材の特質に盲目であつてはならぬ。

教育の對象についての顧慮が足らぬ。教育者の先づ第一に考慮すべきことは、教育の對象となる被教育者に關する調査である。これが不十分であるならば、如何に方法が立派であつても、合理的な體育、適切な指導の出来る筈はない。殊に體育は、その手段の一步を誤れば、生命に危害を與ふる程重大なものであるから、教育の對象に關しては周到なる顧慮を拂はねばならぬ。而るに今日の體育の一般は、對象の顧慮といふことについて餘りにも無關心である爲に、指導の本旨を誤り、甚しく一部分に偏してゐる。

例へば、虚弱兒童に對する顧慮が缺けてゐる爲に、虚弱兒にも健康兒にも同質同量の運

動を課するが如き、或は年齢の多少を顧慮することなく、幼少なる兒童に、學生生徒と同一律の運動を課して相當に行り得るなど、自負するが如き、或は性別的取扱ひを等閑にする爲に、男子の競技會と更に異ならぬ狀況の女子競技會を見るが如き、或は春季發動期の體育に注意を缺けるが如き、等々何れも教育の對象たる被教育者の心身を凝視し、十分なる顧慮をしない結果に外ならない。

教育の對象に關し顧慮すべき一、二の例を擧ぐるならば、

虚、弱、兒、童の取扱ひについての工夫、今日の學校體育は強壯なる者の獨占的體育であり、一部強壯者の特權としての占有に歸し、機會均等であるべき體育は、虚弱者並特殊疾病者には全く均霑してゐない傾きがある。従つて強壯なる者は益々強壯になつて、彼等の不法なる行爲も、一校の名譽を負へる選手なるが爲に、或は強壯なるが故に默認され、一方虚弱者は益々彼等の爲に運動場を奪はれ、用具を奪はれ、運動を行ふべき機會さへも奪ひ去られて、いつまでも日陰者にされ、虐げられ、弱き者は益々弱くなる有様である。

現在我が國に於ては、就學兒童全體の五％は虚弱兒童で、その中男子は二、一四％、女子は二、九％であるといふ。若し我が國の就學兒童を毎年一千萬人とするならば、その中五十萬人は所謂虚弱兒童であるといふことになる。彼等は自己の身體が虚弱である爲に、精神が憂鬱であり、不活潑であり、一方強壯なる兒童の爲には虐げられ、同情なき教師の爲には別者扱ひにされ、邪魔者扱ひにされて、身體はおろか精神までも次第にすたり者となる。遂に彼等は短命に終るか、不具者となるか、或は不良化して社會に害毒を流すか、何れかの途を辿るのである。ことごとくに至るまで彼等に對して社會は全く對岸の火災視して袖手傍觀の體でありながら、目前に彼等を見出した時、始めて社會政策がどうの、國家政策がどうの、と騒ぎても時は既に遅い。吾々教育者は、かゝる恵れない虚弱者に對して、より多くの同情を持たねばならぬ。そして彼等の若干を體育によつて救濟すべく運命づけられ、責任づけられてゐることに氣づかねばならぬ。元より彼等虚弱兒童の全部を體育によつて普通兒に引きあげるが如きことは、全々望んで、なし得ることではない。然し

年々歳々生ずる五十萬の虛弱兒童の幾分は必ず救済し得ることは、虛弱兒童になる原因を探究すれば、明らかにその邊の消息を證明するものがある。

イ、不良の遺傳

病弱質、酒精中毒質、梅毒等

ロ、不良の住居

狹隘、防寒設備の不良、日光、空氣、水等の不良

ハ、不良の榮養

母性の榮養不良、不良なる哺乳、不規律の間食、好嫌癖の放任

ニ、不良の日常生活、不規律の生活、睡眠、運動の不規律、過勞

ホ、不良なる精神生活

不安、不快、無慰安

ヘ、不良の疾病經過

#### 疾病攝養の過誤

以上の如く虛弱兒童の原因を眺めて見ると、先天的のものと、後天的のものはあるが、確に體育によつてその若干部分を豫防し、治癒することが出来る。

體育の使命は、一部強壯者の獨占的娛樂に任ずるものではなく、虛弱者をしてよりよきへ向上せしめる使命を忘れてはならぬ。現在の體育は全く此の方面の研究を等閑にしてゐるといつても過言ではなからぬ。

年齢によつて取扱ひ上の工夫をせねばならぬ。年齢の多少によつて、その身體なり、精神なりの發達程度に差異のあることはいふまでもない。大人と子供とを比較すれば何人もその相違を考へ得る筈であるのに、世には子供を大人を縮小したものゝ様に誤り考へてゐる人は決して少くない。それが爲に今日の學校體育は、大人のやるやうな體育運動の方法をそのまま子供に強いてゐる傾がある。

例へば國際的大選手が、發走法としては直立發走法よりも蹲踞發走法が有利であるとい

へば上は大學より下は尋常一年の兒童に至るまで、位置について、用意、出發合圖といふ三段形式を一律にやらせようとする。發走法位ならまだしも、小學兒童に投槍や圓盤投をやらねばならぬ理由があるであらうか。やらせねば非常に體育上不利であらうか。又やらせる事によつて如何なる著しい効果があるであらうか。それともこれに代るべき方法が無いのであらうか。國際競技を目標として行ふものには相當理由もあらうが、小學兒童にやらせねばならぬといふ理由はどこにも見當らない。

勿論かく一律にやることによつて有益無害な場合もないではない。而し多くの場合、大人と子供とを同一律にやることによつて何程の効果があるであらうか。又一律にやらなければそこに何等か困難な事情が起るであらうか。一律にやることによつて非常によい結果を得られるとか、或はやらねばならぬといふ確たる理由があれば別問題であるが、現在の狀況に於ては一律にやらねばならぬといふ程の理由もなく、又一律にやつて多くの場合不自然に陥り、不合理であり、無理であり、危険である。教育者はこの邊の事情を今少し本

氣に考へねばならぬ。

兒童の心身は大人の心身を縮小したのではなく、兒童には兒童としての境地があり、特質がある。大人にも亦大人としての境地があり、特質がある。大人に有効なる方法必ずしも小人に有効ではない。大人が喜んでやることを子供が身も魂も打ちこんで、より喜んでやるなど、考ふることは餘りにも早計である。精神活動に於ても、内臟諸器管の發育比率に於ても、その機能に於ても、その他骨格にしても筋肉にしても、大人と子供とは大いにその趣を異にしてゐる。而るに今日の體育はそいふ事には極めて無頓着で、見眞似聞眞似を基として上級學校と同一律の手段方法を課するが如き教育者のあることは苦々しき沙汰の限りである。

身體の組織、精神活動、運動能力等は年齢の多少によつて、否子供と大人によつて趣が著しく異つてゐるのであるから、今後の學校體育は、年齢を體育實施上の一顧慮として、その教材なり、分量なり、指導法なりを工夫しなければならぬ。

春機發動期の體育についての顧慮 春機發動は、人種、氣候、風俗、習慣、性等に依つて大いにその時を異にするも、大體に於て日本人は男子に於ては、十四、五歳、女子に於ては十三、四歳頃發動期に入る。この期に入る一年前より精神、身體の兩方面に一大變化が起つて来る。従つてこの期に於ける體育には特別の注意が肝要で、その變化は男子よりも女子に於て特に著しいのであるから、女子の體育は一層周到な注意のもとに行はねばならぬ。

この期は子供としての最後の成長期であつて、言ひ換へれば子供が大人に變る時期である。この二、三年乃至四、五年の間に、身長と體重とは著しく増加し、一年間平均身長は三・八一纏、體重は四九・九六瓦の増加をなすといふ。體重の増加は、骨格や筋肉がその容積を増し重量を増すといふのみでなく、皮下脂肪が著しく沈着して、この期の者には特別な柔か味と、圓味を見出し得るのはそれが爲である。筋肉の増加は、筋肉の力を増す以前に増加するから、結局筋肉の力は弱くなつたわけで、筋の調齊力が不十分になる。尙又

骨が成長して長くなり太くなるといふことは、それ自身槓桿作用に變化を與へることになる。又種々の異つた骨が時期を異にして成長することは、槓桿の變化を一層大にすることになる。従つてこの時期の子供に通有な性質として表はれてくるのは、運動の要領を會得する能力の缺けて來ること、是れはその爲である。子供の成長が急激であればある程、餘計に運動は不器用になる。一方急激な成長の爲に生じた疲勞は、調率作用を一層減ずることになる。これ等の身體的變化は、大體男女共通であるから、この時期には調率作用に對し、新たな訓練を施すことが肝要である。

この時期以前に於ける女子は、骨盤狭く、肩廣く、その體型殆んど男子と大差はないが、この期に入ると骨盤が著しく發達して肩幅と等しくなり、分娩の準備として骨盤を形成する相互の骨の結合が比較的弛く固着してくるから、骨盤が廣さを増すにかゝはらず、その關節がそれに應じて強味を増さない。従つて此の期に過激な運動を課することは頗る危険といはねばならぬ。骨盤の發達は腹壁をしてより廣く、より強くする。これと平均を

保つために骨盤から胸部に至る筋肉は、幾分よりよき釣合を保つこと、なり、且つ上體が比較的軽いといふ事實が加はつて、上體の運動を割合容易にすることが出来る。

尙又女子の廣い骨盤は、大腿骨を一層斜内方に傾けるが爲に、機械的に女子の脚を弱める原因となる。

一面この期に入つた者は、心悸亢進、息切れ等の傾向が増して来る。これは急激な成長の爲に循環器に過度の活動を要求するにかゝはらず、これ等の器管の發達は身體の他の部分の發達と相當しない爲である。子供の時の心臓の重量は、身體の重さに比して大人よりも大である。それが爲に子供の心臓は相對的に強いといふことが出来る。子供が遊戯、競技に際して大人も及ばぬ持久力を表はすのはその爲である。尙又發動期に入ると大動脈口が子供の時より比較的小さくなる。これも心臓の働きを大にする基となる。

以上は主として春機發動期に於ける肉體方面の著しい變化であるが、精神的方面にも亦非常な變化を起すのである。

この期に入つた男女は共に精神作用が極めて敏感となり、心の作用に平衡を失つて些細なことに泣き易く、怒り易く、笑ひ易く、悲しみ易くなる。この徴候は性により、人に依つて程度は大いに異なるも、一般にこの徴候は明瞭に認めることが出来る。この徴候に關しては、體育指導には勿論、他教科の指導に關しても十分顧慮すべき事柄である。

この期に入つた者に課する體育運動は、その撰擇實施について相當用意があらねばならぬ。この期に於ける子供の比較的薄弱なる筋力と循環器に對する要求の過大とが原因となつて彼等の有する持久力は強き運動によつて要求される緊張に堪へることを困難ならしめるものであるから、この時代の運動としては努力の大なる運動を數少なく課するよりも、容易な運動を數多く課するがよい。又呼吸循環を少しでも妨げるやうな運動は、この期の子供には決して課してはならぬ。殊に運動中は息をとめることなく、呼吸を続けさせることは、子供の運動の時に大切なことであるが、この期に入つた子供には尙更大切である。勿論運動場の空氣は新鮮で、塵芥の無い處を撰ぶべきことは言ふまでもない。



適當なる歩と走とは、この期の子供には頗る有益である。即ちこれ等の運動は總體としては非常な分量の運動となるが、その運動の一つ／＼は極めて樂な運動である。歩と走との一步は、強い脚筋に對し、取り立て、言ふ程の緊張を與へるものではないが、それが繰返されることに依つて十分なる運動となるからである。尙又普通の形式で行はれる歩と走とは胸廓を固定することなく、呼吸を妨げることもない。この點から、この期の女子にはダンスの如きものは好適の材料である。是れに反して強い跳躍運動、轉廻運動、迅速運動等はこの期の女子に極めて有害である。

前述の如く、春機發動期は子供としての最後の發育期であり、大人になる界目であつて、身體がその恰好を得る時期であるから、この期に勉めて體型を整へるやうな運動を課することが大切である。従つてこの期に於ては餘り過激な運動を避け、不正な姿勢を矯正するに都合のよい運動を撰んで、それを正しく行ふことに意を用ひねばならぬ。特に女子の體格に表はされてゐる特殊な状態、殊に大きく而も弛く固着された骨盤、より多く傾斜

してゐる大腿は、彼等の跳躍する場合に一層の深い着陸を必要とするのであるから、そうした些細な點まで意を用ひねばならぬ。

かく春機發動期の體育は、特別に周到な注意が必要であるにもかゝらず、現在の狀況は一般に極めて無關心である。

女子體育の願慮 女兒並に女性の體育は現時の我が國に於ては特に注意を用ひる必要がある。この事に關しては改めて後章に詳述するからその方へ譲つておく。

環境に關する願慮の不足 環境に對する願慮といふことは、教育効果を徹底する上に重要な一條件である。環境が兒童の心身に如何に大なる影響を及ぼしてゐるかは今更いふまでもない。孟母の賢なる所以も環境を願慮して居を三遷したことが一つである以上、環境の影響といふことを常に願慮すべきである。この影響が善良なるものであるならば益々これを助長し、若し不良であるならばこれを矯正する手段を體育の上に願慮せねばならぬ。被教育者の環境が、都市か田舎か、都會でも繁華の地か郊外に近い所か、家の職業の

大多數を占めるものは工業か、商業か、農業か、富の程度、文化の程度、生活様式並にその生活程度、風俗、習慣は勿論、地方的精神並に身體上の得失、地方的疾病、氣候、地勢等より、通學距離に至るまで精細に眺め、而る後體育手段を講ずべきで、それを主體として、そこに一般的のものを加ふべきである。

如何に體育が必要なればとて、環境を無視しての體育は非教育的である。今左に環境を重視すべきことの卑近な例の一、二を擧ぐるならば、

和歌山縣の或る一僻村は、米の收穫なく、他の産物とて見るべきものもなく、交通又極めて不便にして富の程度の如きは、問題外である。この村人は僅かばかりの陸稻を作り、その米を粥に煮いて常食としてゐるが爲に空腹を感ずること甚しく、それを凌ぐ爲めに土地に産する柿を始終間食して居る。かるが故に子供達は榮養不良に陥り、顔色蒼白腹部膨滿して見るからに悲惨な状態である。學校への御辨當もその御粥を直徑六糎、長さ十五糎位の竹筒に入れて持つて行く。冬はその冷却を防ぐ爲に腹部に入れて遠い者

は二里餘の山道を通學すると聞かされて、私はうたゝ同情の感に堪えなかつた。この同情すべき兒童に若し他地方と同一率の體育運動を課するとしたならば、彼等の生命力の向上にあらずして、死の道へ急がせるものといはねばならぬ。

尙又私の郷里は、南北三十里、東西三十里の廣大なる面積を有しながら、昭和の今日ですら僅か數哩の鐵道よりない。勿論電車などのあらう筈がない。この不便な田舎の小學兒童と、東京市の眞中の兒童とは、兒童であることに何の違ひもないが、彼等の身體的並に精神的方面には想像以上の差異のあることを見逃がしてはならない。私の田舎の山野、河川、澄み渡つた空氣、これ等大自然の恩恵に依つて生まれ、加ふるに父祖傳來の土地より良穀を得て生活しつゝある子供達と、黃塵の中に、飲む水、食べる米にすらこと缺き、一坪の遊場さへない大都市の子供とを比べた時、如何に田舎の子供の方が幸福であるか測り知れない。従つてのんびりと、素直に何のこだわりもなく育つた田舎の子供の身體は、とても都會地の子供の比ではない。而し田舎の子供は、環境の支配によ

つて生活が都會地の兒童の如く眞剣ではない。文化的刺戟も少い結果、精神活動が裕長であり、一面機敏でない。競争が激甚でないだけに、努力とか向上とかいふ精神作用は極めて鈍い。かく田舎の兒童と都會の兒童とは身體的にも精神的にも甚しい差異がある。體育に關してはこの點を十分顧慮してその手段を講ぜねばならぬ。

而るに現状は、田舎の先生が夏休に都會へ講習に出て、辛うじて覺えたのを、そのまま田舎に歸つて教へるのであるから、東京の眞中の小學校の體育も、田舎の小學校の體育も、その手段方法に何の變りもない。勿論共通な材料も必要であらうが、全部が同じやうな材料、同じやうな手段方法で、果して兒童に適切妥當なる體育が出来るであらうが。兒童の環境を眺める時、必ずやそこに體育上顧慮すべき何物か潜んでゐることは何人も首肯し得るであらう。

尙又冬季、寒氣の強い地方では一般に兩手を脇に入れて、上體を前に屈けて歩く風がある。これが爲に脊柱か彎曲し易く、女子にこの影響を多く見ることが出来る。かやうな地

方に於てはこれを豫防し、矯正するやうな運動が他地方より特に必要な筈である。

又或る地方では新たに鐵道工事が始められたので、小學兒童までが餘暇を利用して賃金を得る爲に、自己の體力に過重な砂利の負荷をした爲に、何時の間にか下腿が過重な負擔に堪え兼ねて、O字形脚の兒童が非常に多くなつたといふ話を聞いた。これは勿論一時的な現象かもしれないが、それを放任するといつしか永久的な、固定的なものになるのである。この場合に於ても適當な體育手段によつて救済すべきである。

この外地方的特殊疾病に關する消極的、並に積極的方面の體育を考究することの必要な場合は決して少くない。

今日の體育は積極方面の體育運動のみを、何等の地方的環境の顧慮もなく同一律に行つてゐる。これでは決して合理的體育とはいはれない。今後の體育に於ては環境の顧慮といふことを體育の主要條件として重視せねばならぬ。

教科の本質に即した教授法の工夫 教育全般に關し、或は個々の教科に關する新思潮、

新諸説、新傾向は目まぐるしいばかりに次から次へと流れ出る。これに對して實際家は朝に採り入れ、夕に棄てる有様で全く寧日がない。而して採り入れた爲めに効果をあらはして來たものもあるが、多くはかへつて失敗を招てゐる。

その一例を擧ぐるならば、體操科の指導に自由教育的取扱といふ美名にかくれて放任放縦が公々然と行はれ、或は個別的とか自覺的とかいふ取扱ひによつてなさんとする者は、兒童に向つて自分でよいと思ふ所まで臂を擧げてみよと、上肢の運動を命じたとせよ。或る兒童は教師の歡心を買はんが爲めに自分の體力以上の努力をなし、或る者は十分やつてゐるかの如く見せて力量以下のことをやつて怠けるといふ結果に陥り、又自學取扱が流行すると、教程を兒童に暗記せしめてその通りに行はしめ、先生は袖手傍觀の態、これを以て天張自覺的取扱ひと自負して居る様では、今日より、よりよき向上、よりよき結果を望むことは至難であらう。

現時の初等教育界は、自分達が眞の實際家であることを忘れ、その尊さを自覺せず、吾

々の祖先が永い努力の結果築き上げた歴史の跡を、何の惜氣もなく振りすて、何等の顧慮もなしに新思潮、新諸説、新傾向を模倣して、魁の功名を得んとすることは何たる淺ましい事ではあるまいか。

もとより新しい思潮、諸説、傾向を研究することは大切である。若しこれを怠ればそれこそ時代離れた教育者になるであらう。而しこれを實際の仕事の上に取り入れやうとするには、十分の用意がなくてはならぬ。新しい思潮、諸説、傾向にはそれ／＼若干の美點長所があるであらうが、何れを如何なる教科の取扱ひに當嵌めても必ず有効とは限らない。中にはかへつて、尊い過去の建設をさへ破壊して、取り返しのかね破目に陥つてゐる輩も決して少くはない。

新しい思潮、諸説、傾向を取り入れるには、先づそれ等がよつて來た所以を探究し、併せて教科の本質を凝視して、若しその特性を發揮する上に、在來の方法に比べて有効適切妥當なりや否やを最初に考へなくてはならぬ。更に兒童の該科に關する過去及び現在を考

へてそれに対する能力を批判しなければならぬ。一方眼を轉じて兒童の環境を考へ、教師自身の才能なり、手腕なりに思ひをめぐらさねばならぬ。更に設備の實狀から將來への繼續に關することまで熟考せねばならぬ。若しこれ等の中の一に、十分なる顧慮が缺けてゐるならば、その方法が如何に立派であつてもその教科の適切なる指導を望むことは出来ない。而るに現状は、これ等の肝要なる條件の顧慮を殆んど度外して、唯漫然と新しきが故に、珍しきが故に、流行するが故に、取り入れるといふ有様である。

由來各教科にはそれ／＼特別な構造があり、本質がある。それを確實に把捉し、それを基礎として出發する所に眞にその教科に適はしい取扱ひ法が生れ出るので、何れの教科にも好適なる教授法などのあり得ないことは、萬病に効く藥の無いことと同じである。若し斯の如き方法がありとすれば、それは毒劇藥の如く、適中すれば大効があるが、一朝誤れば大害を招くことを承知し、覺悟せねばならぬ。果して現在の初等教育界、殊に體育方面に於て、この點に關し教育者の反省を望む必要はないであらうか。

絶えず正しく普くを目標として、初等教育に於ける體育の目的は、被教育者をして將來精神的にも、身體的にも健全に育つ基礎を作るのである。この意味から體育の獎勵には絶えず、正しく、普くといふことを目標として進まねばならぬ。

今日の狀況では、體育を直接指導する任にある教師ですら、學校體育に對して誤つた考へを持つてゐる者が決して少くない。従つて多くの世人が體育運動に關して理解の正しかるべき筈がない。世人は往々にして對校競技とか、運動會とかいふ一時的の（一時的でないものもあるが）際立つた仕事、若しくは少數の優良なる選手を見て、その學校の體育を云々するパロメーターの如く誤り、一方教育者は免角こうした世人の評に氣を病んで、なるべく世人の意志に迎合するやうに努める輩がある爲に、徒らに勝敗の末に走り、技術の巧拙に重點を置き、擬巧に傾き過ぎて、一時的な一種の觀劇的、虛榮の意味が多分に含まれてゐることは誠に遺憾である。殊に女子の方面にこの氣分が多い。

國民教育の原則から眺めて、第一に體育運動の普及を圖らねばならぬ。第二に正しく合

理的であらねばならぬ。第三に不斷の實行を重んぜねばならぬ。この三つの目標に到達せんとして努力する結果、自然た優秀なる選手を産み出すことは大いに望むことである。これ等の選手を利用して適當に他校との競技會を催し、一般體育の振興を促すことはもとより望ましい事である。

而るに本末を轉倒し、輕重を誤り、第三者を對照とする現時の體育は十分に反省の餘地がある。

絶えず、正しく、普くといふ體育指導の目標から必然的に考慮すべき問題は、運動種目についてである。彼の所謂陸上競技種目を學校體育上にとり入れることについて、私は一つの大きな疑問が今に氷解しない。讀者よ、お前の頭は古いからだとしかく簡單に片付けてもらいたくない。それは陸上競技種目中、ランニング、幅飛、高跳等はもとよりこれを取り入れる事に對して大いに賛意を表するものであるが、彼の槍投、圓盤投、砲丸投等の如きものが學校體育の上に幾何の價值があるであらうか、又是等に代るべきよりよき運

動はないであらうか、それともこれ等を競技の中から省いたら競技の價值をどれだけ低下するであらうか、私には決してかくは考へられない。歐米に行はれてゐるが故に、現在流行してゐるが故に、唯漫然とこれを行はしめつゝあるのではあるまいか、男子の中等以上の學生、生徒に行はしめるのは多少の理窟はつかないでもないが、女學校の生徒や小學校の兒童に行はしめるに至つては、どこに指導者が行はしめないのに優る價值を見出してゐるのであらうか、私には全くその氣がしれない。

女學校の生徒乃至小學校高學年の女兒の體育運動については、更に項を改めて述べるつもりであるが、近來甚しく脱線氣味のあることは眞面目に考へた時誰も想起するであらう。唯單に男子がやるから女子にもやらせるとか、女子にもやらせてやれない事はないからやらせるとかいふ以外に是等の競技を課するについての確立した意見には悲しいかな未だ接した事がない。若しこんな考のもとにかゝる競技運動を課してゐるとすれば、女子の體育指導者は何たる淺薄さであらう、多數女子の爲に同情せずにはゐられない。

特に小學校に之を課することは言語同斷で、恐らく何等の意見はあるまい。唯専門學校、中等學校の模倣に過ぎぬであらう。もとより模倣の全部が悪いといふのではない。良い部分を模倣するのに何の差支もないであらうが、模倣しなければならぬといふ、理由なくして模倣するのは愚の至りである。かく價値の明瞭でない、而も一步を誤れば生命を損傷する様な、現に幾多の悲惨な實例を見ながらも、尙こうした危険な運動を採用する必要は毛頭無い。これ等の競技によらなくとも、女學校に於て、も小學校に於ても、他にこれに代るべきもつとく有効で、而も危険の少い運動はいくらもあることを信ずる。かゝる競技を課する爲に、運動そのものゝ絶えず、正しく、普くといふ目標が打ち壊されてしまふのではあるまいか。更にこの三つの目標に到達せんとする立場からは是非考へねばならぬことは、選手問題である。この目標實現の爲に努力する結果現はれたる選手は望まじきことであり、且つ又それ等の選手に依つて競技會が適當に行はれることは、一般體育振興上十分意義のあることは前述の通りであるが、現今の如く限られた極く一部分の選手

によつて、運動場を独占され、他の者は運動が不可能であるといふやうなのは速に避けねばならぬ。かゝる選手を無闇に新聞雑誌に書き立てたり、無闇に賞讃したり、表彰したり、乃至は彼等が大道狭しと濶歩する間は、體育の絶えず、正しく、普くといふことは望まれない。勿論體育の徹底といふ様なことは一場の夢である。

今日の多くの選手は、體育運動を職業化し、或は一部道樂者の占有に任せ、乃至は學校の宣傳廣告に利用し、或は教師や世人の娛樂化し、果ては一種興業化しつゝあるではないか。當局が近時しきりにこれが對策に苦心してゐるのも當然のことである。

試みに有名な運動選手を有し、(國際的選手の意ではない)我が校の體育は斯の如しといふ様な學校の全體を眺めて見ると、必ずしも體育は學校全體に普及してゐない。甚しきは選手以外の者は運動をやつてゐない學校さへある。之に反して立派な選手もなく、従つて運動に名をなしてゐない學校にかへつて體育が向上してゐる例は世間にいくらもある。最後に體育運動を絶えず、正しく、普く行はしめるには、獎勵と取締りに十分なる意を

用ひねばならぬ。若し獎勵の度が過ぎると本務を忘れて熱中し、耽溺するやうになり、取締りが嚴に過ぎると體育運動が萎靡不振に陥る。この點は指導の任に當る者の最も深重なる注意を要する點で、緩急宜しきを得るとは古い諺であるが、それを不斷心掛けねばならぬ。

#### 第四章 喜ぶべき學校體育の諸相

余は前章に於て、憂ふべき現代學校體育の諸相につき概況を述べたが、一步退いて考ふる時、現代の學校體育には觀過し難い喜ぶべきいくつかの美點が、くつきりと光輝を放つてゐることを考へずにはいられない。

個性の尊重 現代の學校體育に現はれた喜ぶべき最大の現象の一つは、個性の尊重である。これは獨り現代の學校體育のみならず、小學校の全教科を通じて、否全教育、更に擴めて現代に於ける社會思想の全般に亘る一大特長といひ得るであらう。

人間各個人の尊さ、それは今日や昨日の事ではなく、少くともルネサンス以來、吾々の思想界を著しく彩りかけてゐた最も大きい、而も最も美しい叫びではあつたが、眞に徹底的ではなかつた。現代人はこゝに徹底的に自覺した。そして強く叫んだ。斯くして永年無智なる者の爲に虐げられてゐた女子を發見した。教育者の前に兒童を發見した。見出し易



くて見出し得なかつた眞黒の労働者を發見した。工場を發見した。生活の資料を培ふ田園さへ辛ふじて發見した。かくて現代の思想界は、あらゆる方面に亘つて革命の烽火を擧げ、大小の差こそあれ實際運動を捲起して、全人類の幸福を認め、まつしくらに突進すべく勇敢にも戦闘を開始したのである。

こうした思想、世態も歸する所は、人間の個性尊重の實現に外ならない。人間は人間なるが故に尊い、女子は女子として、児童は児童として、労働者は労働者として、その個性を發現する所に尊さがある。これは絶対的のものであるといふのが現代人の總べてを通じての深刻な叫びであり、自覺である。

しかして、人間は人間なるが故に尊く、女子は女子なるが故に、児童は児童なるが故に、労働者は労働者なるが故に尊いといふのは、何を意味するのであらうか、たゞ單に、食ふて、寝て、暮すだけでも、人間は絶対に尊いといひ得るであらうか、さうではない。若しさうであるならば、何等他の動物と異つた所がない。従つて人間のみ絶対に尊いとい

ふ理由にはならない。しからば人間の尊いといふことには一つの前提を必要とする。その前提のもとに認容される人間であらねばならぬ。ではその前提とは何かといへば、獨<sub>立</sub>性<sub>能</sub>即ち個性の發揮である。各個性のまゝに、獨<sub>立</sub>性<sub>能</sub>のまゝに、他人の糟粕をなめない活動をなし、貢献をなしてこそ尊いのである。人間をそうした存在者として見る時に於てのみ、人間は人間として絶対に尊いといひ得るのである。現代人はそこに徹底的にめざめた。男は男として、女は女として、子供は子供として、大人は大人として、資本家は資本家として、労働者は労働者として、小作人は小作人として、地主は地主として、各利用さるゝことなく、各掣肘さるゝことなく、支配を受くることなく、己が個性のまゝに、己が天分のまゝに、己が意のまゝに、各々が皆各々の天分を持して生きながら伸びて行く、そこに始めて意義ある人生を見出し、萬人皆人間としての尊さを確保し、發揚し得るのである。されば人間の尊さは、個性的活動と相俟つて、始めて確立し得るので、個性的活動の無い所に人間としての尊さは無い。自由の成長、個性的解放の無い所に人類の尊さは認められ

ない。

故に人間の尊さを絶對的に主張する現代思想が、萬人の個性的活動を將來することは當然である。こうした個性尊重の叫びに相呼應して、確に自己を見出して來たことは争はれない事實であるが、それと同時に己へつて自己を見失つた者のあることも致し方のないことである。

こうした社會思潮の影響を受けて、教育界にも個性尊重の潮流が渦を巻いて押しよせて來た。見よ。現今の教育上に於ける何々主義と唱へられてゐるものは枚舉に暇の無い程あるが、それ等の總べての根底を流るゝ思想は、個性を尊重して而も發動的に伸展せしめやうとするのである。従つて教育の本質さへもかやうに見へるやうになつた。教育作業の全般、各教科の教育はもとより、總べてに亘つて兒童自らの個性的發動を尊重するやうになつた。

従つて體育の上にも當然この思潮は流れこんで來た。その結果、放任主義に流れ、無指

導に陥つたきらいはないでもないが、兒童が生きて働いてゐるやうになつたことは、いなみ難い喜ぶべきことの一つである。

而しこの個性尊重といふ高價値的な、而も本質的のものが一部の人間には誤解され、或は極端に流れ、却つてその價値を没し、非本質的に走つてゐることは如何にも惜しいことではあるが、兎に角、從來病人だとか、不具者だとかいはれて除け者にされ、日蔭者になつてゐた發育異常兒童や、虚弱兒童が見出されて來たことは、何といつても喜ばしいことである。

女子體育の尊重 女子體育の尊重は個性尊重の結果として現はれた一つであることはいふまでもないが、特に現代に於ける喜ばしき事の一現象に擧げることが出来る。

古く我が國の女子は女子としての天賦の性能を發揮することに於ては、決して男子に比して遜色はなかつた。而るに漢學の傳來以後次第にその影響を受けて、四角四面の箱入娘式に生まれ、生來のすがくしさと、生氣を取り除けられ、女大學式に育てられた女子を、

女子の典型であるかの様に考へ、かゝる女子がやがて禮讚の標となつたのみならず、女子自らも女子本然の姿を忘れて、いつとはなしに、かくあることを希ふ様になつた。勿論少數の例外はあつたにしても、一般的傾向は確にかくあるやうになつた。

かくして年月の経過は、かくあることが次第に女子としての天賦の性能の發露の如く自らも考へ、男子も考へるに至つた。それがいつしか常道として何人もその理非を考へ、驚異の感を抱くものがなくなつた。

男子は外に出て活動するもの、女子は男子の収入に依つて衣食し、男子の寄生虫の如く家におゐて、時間と費用とを徒費し、のらりくらりと漫然その日を送り、男子の御機嫌取りに奉仕するといふ外、女子としての存在意義を認められなかつた。男子は花柳の巷に紅燈緑酒を追ひ、更に幾人かの蓄妾を持ち、下等な動物と何等異ることのないやうな生活も、男子の享有する當然の特權の如く考へられ、自他共に何の不思議も起らなかつたのである。

かくして女子は、女子としての個性的性能を男子の爲めに奪ひさられ、人間としての尊

貴の觀念さへ男女は不平等であるかの如く女子は蔑視さるゝに至つても、それは當然であるかの如く女子は甘受して來た。

かくの如く長い間の歴史的社會思想や社會制度、乃至は家庭生活の因習様式は、遂に女子の外形的方面のみならず、精神方面にも非常なる惡結果を齎らした。依頼心を増長せしめ意志を薄弱にし、團體的精神の活動を阻害し、加ふるに個性の發動、向上を希ふ精神までも極度に萎縮せしめ、一方身體の均齊なる發育を阻止して外形の美を失はしめ、延いて身體的能力を著しく低下せしめたのである。

最近社會思潮の影響を受けて、個性尊重が叫ばれ、人間としての男女の尊貴平等論が唱へらるゝや、幾百年來虐げられ來つた女子、無能力者の如く考へられてゐた女子、身體的に精神的に幾多の侮辱を與へられ、男子に隷屬視されてゐた女子は自ら大いに醒めた。男子も心ある者は、この傾向に喜びと同情を持つた。さうして永らく監禁同様の扱ひを受けてゐた女子は、自由を眞向に叫んで跳び出した。人間尊貴の平等を獅子吼して、あらゆる

方面に進出し出した。女子天賦の個性發動に醒めて雄々しくも出發した。而して、若干の誤れる方向に躍進したことはかへすくも同性の爲に惜しむべきことであることはいふまでもない。

かく自由平等機會均等を叫んで男子と總べての方面に同等の地位に立たんとする事は非は別として、少くとも從來の因習を破つて、人間尊貴の爲に、女子本來の性能を伸展せしめやうとスタートした事は、その意氣に於て、同性の爲には勿論、國家の爲に祝福すべき事の一つである。

その一現象として、女子の體育が叫ばれ、實行に向つて著々その歩を進めて居ることは、現代に於ける喜ぶべき一項として見逃すことは出來ない。往年世界の槍舞臺に故人見女史が、日東帝國の女性を代表して萬丈の氣を吐いたことは、今尙人の記憶に新たなる所であり、更に先年羅府に於けるオリンピック競技會に多數の女子を參加せしめた事は、女子體育振興の途上にある今日、一服の興奮劑として十二分の價值あることを信じて疑はない。

もとより一般女子の、體育の目標なり、その手段なりをかゝる代表的女子競技者と同一の程度に、同一の課程に置くことの是非は、改めて後章に述べるとして、兎に角女子が自己の體育に醒め、これを尊重し、それによつて己の身體を、己の精神をよりよき方向に、一歩でも進めやうとして來たことは、女子の爲めには勿論男子も亦共に喜ぶべき限りである。

科學的、深化 現代の體育が、その總べての方面にわたつて科學的に進歩し、深味を増し合理化に一大躍進を遂げつゝあることは、體育上喜ぶべき現象の三である。

從來の體育は、單に手を動かし、足を動かし、跳んだり、躍ねたり、することのみの模倣に過ぎなかつた程それ程、科學的論據の究明を忘れてゐた。手を動かし、足を動かしてゐながら、教師自身でさへその部分の筋群がどう働いてゐるのか、骨がどう作用してゐるかをさへ知らない程であつた。まして手を動かし、足を動かすことによつて、全身の臟器に如何なる結果を將來するか、心意の上に如何なる影響を與ふるかなどに付いての考慮の如きは一向問題でなかつた。只教師は輕業師のやうに、器用に手を動かし、足を動かして

見せ、(餘り器用でもなかつたが)被教育者は、それをおそろしく模倣することが體操であり、體育であつた。従つて體操の技術が多少素人離れし、體の外形が丈夫そうになれば、それが名體操家であり、名體育家であるかの如く人も許し、自らも自惚れ、被教育者の體操の技術が上手であればそれで眞に體育が向上したと、賞讃される程皮相的な體育であつた。内臓諸機能の向上とか、精神の陶冶とか、人格の向上とかいふことには何等の思慮を用ひなかつたのが在來の體育と稱するものであつた。

かるが故に從來の體育は、暇をつぶすもの、遊ぶもの、乃至は輕業師の眞似をするもの、人體の外形を丈夫そうにするもの、内臓諸器關の發達を害してその作用能率を害し、加ふるに粗野なる精神、荒々しき行爲を助成するまでのことで、科學的智識の必要などは想像だにする者が無かつた。爲に體操を受持つ教師は學校中で一番頭の悪い、思想の洗練されてゐない者と相場が決つてゐた。體操は何年やつても効果の何物をも見出すことが出来なかつた。それが爲に體操は益々馬鹿にされ、體育は無用の事であると見離されてゐた觀があつた。

ある。

而るに科學の進歩は、吾々の體育といふ人工的な仕事に對して、肉體と精神と兩々相俟つて向上せしむべきもので、精神を離れて肉體的能力のみを増さんとする體育は眞の體育ではなく、他の動物の動きと何等異つた所がない。人間が體育を行ふ所以のものは、この精神の健全を併せ進め様とする所に體育の尊さのあることを力強く立證してくれた。

櫻井博士は體育の一手段である體操の各動作について、一々解剖學の見地からその利害得失を述べられた爲に異狀の進歩を遂げ、更に吉田博士は、運動の總べてにわたつてそれらの運動が、吾々人間の神経系統、循環系統、呼吸系統、消化系統、泌尿系統、骨格系統、筋肉系統、皮膚等の各々に及ぼす影響は勿論、これ等の總べてに對して綜合的に微妙なる作用を起して、人間が生存力を増し、幸福を享有するには如何にすべきかについて生理、衛生的見地から、多年の研究による蘊畜を發表されるや、我が體育界は科學を基礎として隔世の進歩を遂げた。以來幾多の學者によつて解剖、生理、衛生方面の體育上に於け

る深味は日に日に深められつゝある。

尙又一方には、斯道に熱心なる、學者、先輩によつて、一つのボールを投げるにも、一步の行進をするにも、深く科學の奥に喰ひ込んで究むるは勿論、教材論に於ても、方法論に於てもはた又實施に當つては、その課程を教育學の教ふる所に従つて、合理的に進み、更に進まんとして居るのである。

かく久しい間閉されてゐた體育殿堂の扉も、解剖、生理、衛生方面については開かれた。而し尙堅く閉ざされてゐるのは心理的方面の扉である、やがては何人かの手によつてこの方面にも光輝を放つであらうことを期待してゐるのである。而しながら兎に角我が國の體育界は科學的に非常な深化を遂げたことは誰も否定することが出来ないであらう。

**本質の究明** 濁水のやうに濁りきつて本然の姿を、本然の質を見失はれるまでになつてゐた從來の體育は、次第に清水に澄みかけて來た。そうして眞の姿を見出し得るやうになつて來たことは喜ぶべきことの第四である。



從來の體育は、その目的觀に於ても、方法觀に於ても、教材觀に於ても、純であつた。大それた邪道に身も魂も打ち込んでゐた。

體育の本質に即しての顧慮などは殆んどなかつた。そうして教師の好き兼ひや、偏狹な獨斷的體育觀や、學校の名譽や、環境の事情や、其他種々な要求に依つて利用化され、方便化され、隷屬化され、體育本來の獨立的光彩の發揚を見ることは不可能な状態であつた。さりとて全教育への共同相互扶助の如きも、體育の本質に立脚した上の顧慮に據つたものではなかつた。

現代の體育は、そうした傳統に叛旗を翻し、他の利用化や、方面化、乃至は隷屬化から逃れて、體育それ自身の本質を究明し、體育の眞使明を果すべく、まじり氣を去り、非本質的な部分を振り落し、邪道よりひき返して、眞一文字に本質に立脚して進まうと考へて來た。

體育の使命は從來の如く單に肉體方面の進歩發展を圖るばかりでなく、精神的健全を保

ち、更にそれを個性に順應して發展せしめることが體育の眞使命であり、本然の質であり、そこに他教科と相俟つて、人間的教育即ち人格構成への全教育を完成する一手段であることを究明して、それに向つて邁進せやうと志して來た。

さて體育の本質的究明に依つて眞使命を見出し、これを遂行する手段としての、各運動教材の、個々の本質を究明し、それ等相互の長短を互に補ひ合つて、完全なる人格構成の榮養素として被教育者に與へやうと心掛けて來た。

こゝに於て、或る一部人士は、體育の本質を究明しやう、各教材の本質を究明しやうとして、かへつて部分と全體とを取り違へ、甚しきは部分的効果を以て全體を壓しやうとする傾向もないではないが、少くとも體育そのものゝ、或は體育各教材個々の本質を究明して、よりよき人間生活の域に進むべく努力しつゝあることを忘れてはならぬ。

體育の民衆化。從來の體育は學校内に限られ、而も學校の一部の横着者の間に限られてゐた觀がある。

而し現代の體育は眞正なる體育道に立脚して堅實に進みつゝあるか、又眞に理解した上に體育が行はれてゐるか、これ等は今暫く論外に置いて、兎に角體育は學校の一部分より全校に普及した。學校を離れて軍隊にはより合理的に、而も急速に進歩した。更に學校の圍を離れ、軍隊の門を出て一般社會に普及した、一商店にも、一工場にも、一社會にも、凡そ大小の差これあれ、人の集團生活を營む所には必ず體育運動の行はるゝ今日の狀況は喜ぶべき現象の第五である。

かく體育が民衆化したことは堅實なる國家の基礎をして、益々堅固ならしむる上に、極めて意義深いものであると思ふ。

然しながら體育の民衆化といふことも、過去に較べてのことであつて末だ幼稚なものである。今日の狀況は、體育實行の民衆化といふより、寧ろ見て楽しむといふ意味の民衆化に近い。それにしても從來に比して、夫婦つれだつて、親子相携へて運動競技を見る者の多くなつたことだけでも結構な現象である。

この民衆氣分をして、一時的の御祭騒ぎに流れず、持続的に而も理解のもとに築かれた、真正なる體育道の建設と、實行に向つて民衆化する日の近からんことを切に希ふものである。

## 第五章 女子の使命

我る西洋の書物に

「男子は農園に女子は爐邊に、

男子は銃劍を持ち女子は縫針を、

男子は頭腦で女子は心臓（愛情の意）で、

男子は唱へ女子は従ふ、

之に戻れば混亂紛糾を招き世を破壊す。」

といつてゐる。

最近新しがり屋の女子、醒めたと自負する女子、乃至はそうした女子の言葉に無條件に共鳴する男子の中には、今日迄の女子は絶えざる男子の壓迫の爲に忍従して來たものとなし、男子と同一律の要求を總べての方面に向つてなさんとする反逆的な挑戦的態度は餘り



にも愚ではないか。彼等同性の祖先の多くの者は、男子又はその子女の爲にその身を捧げること大なる満足をして來たのである。彼の比較的新しい思想の持主であるエレンケイ女史でさへ次の様なことをいつこゝる。

「天は婦人をこの世に降しその生涯を通じて人間生活を眞に人間らしくする爲に温い心の持主たらしめた。この天の賜は母としては子供の神たらしめ、妻としては夫の幸福たらしめ、祖母としては萬人の慰藉者たらしめた。この温い心は家庭の爐邊に集つて來る者を最も強く温めたがそればかりでなく家庭を持たぬ旅の渡り鳥をすら温めてやることさへあつた。何故ならば母性は無限の力を持つものでその性質を與へることであり、犠牲になることであり、他の幸福を願ひ優しい心遣ひをすることにあつた」と、「又男子の仕事は爐に點火することであり、婦人はこれを維持することにある。男子の業は家庭の人々を防衛することにあり、婦人は之等を養護するにあり、これ努力の分業にして人類は仍て以て今日の文化を建設せり」と。

女子としての尊い精神はかくして今日までに向上了たので、必ずしも自稱自覺女や一部男子の論者の言ふが如く、男子に虐げられて來たのではなく、女子本來の性能を發揮して來たに過ぎない。

而して女子本來の使命を今少し詳細に探究するならば、生殖的使命と文化的使命を持つのである。これは男子にも等しく有する使命であるが内容は男女全くこれを異にする。女子の生殖的使命には、先天的の使命として子を産むこと、子を育てることであつて、後天的の使命としては家庭の内助といふことである。文化的使命とは生殖的使命以外の人類文化の進歩發展に對して女子が當然つくさねばならぬ使命をいふのである。つまり女子の使命は子を産むこと、子を育てること、家庭の内助、文化の貢獻と四つに考へることが出来る。

これ等の使命は男女の先天的差異から定まつて來て居るので、いはゞ生物學上の男女の分業である。かゝる目的は種の永續を圖る本能に由來して居るので、更に溯つて何故にか

と探ぐつても、そんなことは分明しない。たゞ斯様な經驗的存在であることを生物學的基礎から肯定するのみである。この欲望を意識して、有機的に道德的にその分業を遂行せねばならぬ。即ち女子は女子の本領に立ち、男子は男子の本領に立つて、その本來の個性的使命を果さねばならぬ。互に他の使命を犯したり、或は自己の使命を放擲するが如きは共に分業の本旨に戻るので、人生の甚しき罪惡といはねばならぬ。

○産兒。女子の使命の第一はいふまでもなく産兒である。産兒は女子の獨占的事業で、根本天職であることには何人も否定するものではない。而るに社會には往々これを女子の耻辱であると考へたり、女子自身のつまらぬ點であり、弱みであるかの如く考へ、中には生みの苦しみや育ての苦勞から逃れる爲に産兒を厭ふものが所謂インテリ階級に増加して來たことは甚しき誤である。

これは實に女子の最大なる義務であり權利である。義務や權利から逃れることは文化人としては一層大なる罪惡である。而も耻辱や弱味ではなく、榮譽であり強味である。つま

らぬ事ではなく最善の行爲である。勿論これは一夫一婦の結婚による夫婦間に於てのこと  
で、放縱なる性の遊戯や獸的生活による場合は論外であることはいふまでもない。

女子自ら耻辱と考へたり、弱味と思つてはならない。大いに醒めて、これは女子の最高の義務であり、特權であり榮譽である。女子ならでは成し得ない尊い事業で、その爲に人類は繁殖し、吾人の生命と意義の發揮と、祖先の尊い文明の繼承と向上を圖ることが出来るのである。この輝しい使命を女子自ら知ると共に男子も亦知らねばならぬ。

産兒の苦痛や、育てる苦勞を逃れんとする女子は女子として價値がないといへよう。而しながらこゝに注意すべき事は、産兒によつて、文化の繼承、自我の發揮、子孫の繁殖をなすのである以上、必然的に優良なる産兒が必要である。眞に立派な子女を得てこそ本當に祖先の遺業を繼承して更に之を隆盛に向はしめ、先人並に自己の生存を意義あらしむることが出来る。斯く優良なる産兒といふことがとりもなほさず祖先の名を汚さぬ所以であつて、我が國體精神の一つである眞の祖先崇拜になるであらう。従つて優良なる女子を産

むといふことは自己に對しては勿論、一般人類社會に對し子孫に對し、祖先に對して最も顧慮すべき點で、優良ならざる子女を産むことは實にあらゆる罪惡に優る。而るに社會の一般は、優良ならざる子女に起因する、不良少女だの、刑務所だの、犯罪だの、少年保護だの、感化院だのと既に芽生えた後に於て随分と心ある人はなやまされてゐる。もとよりこれは大切な事には相違ないが、もつと根本に遡つて考へねばならぬことがある、それはいふまでもなく性教育である。

性教育の必要は可成り前から識者の間に認められてゐる。而しこれを課するといふには學者間にも、教育者間にも、相等議論がある。或る女學校長の會合の時、この問題について衆議の一致した所は次の様に聽いてゐる。性教育は必要なり。

學校に課するとせば、校長か相同年輩の女教師に擔任せしめること。

といふのであつた。校長と女教師に限定されたことは、相當理由があるであらう。而し人格者で相同年輩で智識のある教師ならばあなたがち制限の必要はあるまいと思ふ。一方男

子の學校に於てこの問題について餘り多く議論されたのを聞いたことがない。男子には必要が無い爲であらうか、それともそこまで注意する者が無いのであるならば誠に寒心に堪へない。兎に角これは日本教育否國家の重大問題であつて、家庭に於て父母に教へられることが最も合理的である。而しながら現在の狀況では、家庭で教へたくも無知なる母には教ふるに由なく、教師は腫物扱ひにしてさわらぬがよいといふ態度である。不良兒の出産といふことが、若し性慾の亂用が一原因をなすとすれば、性慾の節制は聲を大にして叫ばねばならぬ。金錢にせよ、時間にせよ、物質にせよ、すべて濫費は罪惡である。自己を害すると同時に他を害する。もとより古の禪僧の如く、禁慾主義の必要はないが、度を失し、道を誤り精神生活を害するやうなことのないやう制慾は何人も必要である。

吾々の行動は餘りにも輕々である。餘りに自己を蔑視し、餘りに子孫を輕視する。貴き子を、貴き國家の財寶を、貴き自己の生命の繼承者を、貴き一個の創造者を、貴き永久の子孫の爲の子を、貴き文化の傳達者を創造するのであることを考へねばならぬ。これ程崇

高な事業が他にあるであらうか、女子がこの尊い使命を自覺すると同時に、男子も自己の不用意を戒めねばならぬ。

余は二十年に餘る教育者生活の間に見た不具、低能兒は實に夥だしい數である。統計の示す所によれば日本に於ては、總人口の百分の五以上の低腦兒があるといふのであるから、少くも人口八千萬と見て、四百萬人の低腦兒が雜居して色々の問題を起してゐるわけである。而して各國の犯罪者並に不良少女の四分の一が低腦兒であることを考へる時は、いよく以て輕視するわけには行かぬ。一方この低腦兒の爲めに教育者は如何なる苦勞をするであらうか、この爲に秀才兒の等閑視されるだけでも國家的重大問題である。感化事業の困難、人口増加につれての不良兒の増加等々目睫の難事である。親の苦しむのは因果應報とあきらめても、子供が可愛想である。人類の不幸である。而して子の爲に苦勞してくれる親はまだしも、世間には何等痛痒を感じぬ親が多いことを見ても「爺教育」否母の教育はより大切である。

ロザノフ及びオル氏はメンデルの法則によつて精神病質の遺傳について次の様なことを云つてゐる。

- 1、兩親共に神経病者なれば子供は皆神経病者なり。
- 2、兩親中一人は健康體なれども、その父母中一人が神経病者にて、他の一人の親が神経病者ならば子供の半數は神経病にて、他の半數は健康體なれども、その子孫は神経病を遺傳すべき素質を有す。
- 3、兩親中一人は健康體にて、その父母も共に健康體なれども、他の一人が神経病者ならば、子供は總べて自らは健康體なれども、その子孫に神経病を遺傳する素質を有す。

- 4、兩親共に健康體なれども、祖父母の中各一人づゝ神経病者なれば、子供の四分の一は健康體にて、神経病の遺傳素質なく、半數は健康體なれども遺傳素質を有し残りの四分の一は神経病者なり。

5、兩親共に健康體にて、一方の祖父母は共に健康體なれども、他方の祖父母中一人が神経病者なれば、子供は皆健康體にて、且その半數は遺傳素質を有せざれども、他の半數はこれを有す。

6、兩親共に健康體にて、祖父母も皆健康體なれば、子供は皆健康體にて遺傳素質を有せず。

この事實を信するならば、兩親の外祖父母の體質まで知らなければ健康の證明は出來ないことになる。従つて中學校、女學校、青年會、處女會、高等科の男女兒に對しては、少くとも周到なる注意と、謹嚴なる態度を以て、性に關し親切に教へねばならぬ。而るに學校に於ては事勿れ主義、父兄は無知不用意と來ては一層寒心に堪えない。

かく考ふる時、惡しき體質や病氣を有する者、子女哺育の經濟的條件の備はらざる者、女子教育の精神的能力の缺けてゐる者は、當然子を産んではならぬ。かゝる者が子を産んだ場合、産んだ親の苦しみは兎に角、子供の苦しみであり、人類の不幸である。自分の惡

品性、惡體質を子孫に遺傳して、子孫をして生れながらに病み衰へさせ、苦しませ、進んでは犯罪までさせるやうになることを思へば、心身共不健全なる者、乃至は惡い病氣の者の結婚は單に一身一家の不幸のみではない。世の富豪には低腦な子女のあつた場合、多額の持參金で他にやらうとする不心得な親があり、一方にはこれを貰ふ馬鹿男があることによつて、如何に社會に惡影響を及ぼしてゐるか計り知れない。かゝる者の結婚について必然的に起る問題は子供である。こうした兩親の間に優良な子供の産れる筈がない。勿論結婚を避けねばならぬ様な人には同情する。しかし安價な同情はかへつて人を殺し、子孫を滅ぼし、人類を不幸に導くことを考へねばならぬ。さりとてかゝる人の結婚を禁止するといふ事も問題であり、性慾の問題は理論で解決されるものではない。性慾といふ強い慾求は自然の本能であつて全然拒止することは不可能である。彼の謹嚴なる大聖人カントですら青年の頃常に手錠をはめて寢に就いたといふ。いはんや凡人に於ておやである。こゝに於て前述の如き不幸な條件にある人は止むなく或る程度の避妊が必要である。もとより自

己の不倫行爲を被はん爲のものは當然許すべからざる罪惡であることはいふまでもない。勿論避妊については可否共に學者の間に論議されてゐるが、不良なる多數の人口増加よりも、質のよい小數の増加が國家の爲に必要であることに何人も異論はないであらう。

兎に角、吾々は産兒といふことに關しては出来るだけ聰明な途をたどらねばならぬ。特に女子は天賦の一大使命を果す爲に心すべきことは、自己の爲に、子女の爲に、人類の爲に、國家の爲に、理知に訴へ、道義心に訴へ、醫學的智識をかり、優生學の研究をつまねばならぬ。

子女の哺育 産兒が女子特有の使命であることに關聯して哺育といふことが當然の使命としてあらはれて来る。哺育は單に生れてから育てるといふのではなく、胎内での成長から獨立するまで、いやしくも我が子に對する一切を含むのである。従つて哺育の使命は、子女に限るものではなく、哺育に要する物質の供給、教育上に於ける威とか力とかいふものは男子の果すべき使命であることはいふまでもないが、女子の負ふ使命は男子に比して

より大であり、より廣範圍である。先づ妊娠中の母の肉體及び精神生活が如何に胎兒に影響するかは、胎教の八釜しく唱へらるゝことから考へても明瞭である。一般に男子の不注意と無關心と、女子の無自覺によつて、この大事なことが等閑視されることは慨はしいことである。體内に子供が宿つた時既に子供の運命は芽生へたのである。出産までの母の清き心、安らかな生活、それが胎兒の運命の基礎をつくるものであると思へば、妊娠中母の責任程重大なるものはあるまい。よかれ悪しかれ出産と同時に起る使命は授乳である。母の懷に抱かれ授乳される時代こそ、人生を支配する心育の行はれる時代であると同時に、身體の健康な礎を築く時である。牛乳で育つた兒と母乳で育つた兒とは、健康上に非常な差異があり、死亡率に重大な關係のあることは學者の等しく證明する所である。然るに世には、授乳すれば自分の容貌が衰へる、年が早くふけて見へる等の心配から里子に出し、乳母に任せ、牛乳で育てる女のあることを見る時、あまりにも自己の重大なる使命を自覺せざる女、母としての誇りをすてた浮薄なる女、虚榮の奴隷となるにくむべき女としてより

考へられない。

更に産兒そのもの、健否は父母の教育程度に大關係があると云はれてゐる。母が無知なる爲に、幼兒の飲食、衣服、住居、空氣、日光、玩具、その他一切の疾病に關する注意を缺き、幼兒を不健康にし、ひいて病氣にかゝらしめ遂に死亡せしめるに至る。幼兒の病氣及び死亡は、その大部分が母の衛生思想の缺乏にあるといはれてゐる。外國の幼兒の死亡率に比して日本のは遙に高い、これは如上の事實を裏書するものである。殊に列強の幼兒死亡率は次第に減退しつゝあるに、日本はこれと反對に増加しつゝある。日本の出産率は他國に比して高い、従つて人口は増口する。然し多く産んで、多く死に至らしめること程、母體の上にも、物質の上にも不經濟なことは無いであらう。まして經濟國難に遭遇せる日本に於ておやである。勿論幼兒死亡の原因には、都市と田舎の生活、住宅の良否、富の程度等々を數へ挙げれば幾多あるであらう、就中母の無知が最大原因であることを知る時、世の女たちは大いに自覺すべきである。

特に産兒は母の手によつてなさねばならぬ。子供の身の廻りの世話、衣食その他すべては到底男子の出来ることではない。母にとつては實に苦勞であるが、子供の爲に、母はつらくともその任に當らねばならぬ。誰かが、もし兩親の中何れかゞ愚人なりとせば父であることを欲する。もし兩人の何れかゞ早く死するものなれば父であればよいといったのは眞に然りで、母なき子供程不憫なものはない。

子供に對しては、身體的にも、精神的にも母に優る教師はない。母の有言無言の間に行はるゝ感化程偉大なるものはない。不良少年の大部分が母なしか、或は繼母による者であることから考へても明瞭である。孟母三遷の教は餘りにも有名な話である。優良兒の背後には必ず賢母がある。偉人の傳記を繙く時、その蔭に有名無名の賢母のあることに誰か氣づかぬ者があらうや、母は愛の權化である。母の愛情の中に育まるゝ子供程幸福な者はない。子供の教育には母は絶対に必要である。報酬を求めざる崇高なる愛、拔目なき細かき世話、これ等は實に女ならではの出来ない貴い使命である。「女は弱しされど母は強し」こ

の一語の中に母の子に對する熱愛の情がつくされてゐる。今日の學校教育の大部分は知育であるから、全人格をつくり上げ、人間教育をなす爲には、母の教育は絶対に必要である。従つて學校教育には母の代理をなす女教師の必要なことは言ふまでもないが、而し女教師でさへあれば如何なる人でもよいといふわけではない。この母親の使命を自覺した女教師でなければその意義をなさないのである。

古來偉人を産んだ母は何れも意志の強い人であつた。意志の強い母、それは子供の爲に特に大切である。至上の慈悲と權威、至上の恩と威、至上の優美と剛毅、これが確に偉人の備ふべき要素であるならば、その若干は自己の修養によつても養はれやう。而し大部分は母の有言無言の教養と感化に俟たねばならぬ。眞の剛毅と、眞の優美とは眞の人を作るといはれてゐる。凡人と雖もその何れかの一つではならない。本當に柔剛打つて一丸となつた、男性的な崇高な強さと、女性の優美さを具備した女——母であらねばならぬ。

更に哺育の途上大切な女の使命は、知育の出来る母たることである。早教育の大切なこ

とが是認される今日一層女たり、母たる者は心すべきである。子供の日常は、總べて懷疑そのものに終始してゐる。次から次へと疑問を辿つて行く。子供程求知心の強い者はない。而るに無知な母によつて、「やかまし」といふ一言で總べてが無慈悲に却けられる。彼等の欲求心の芽生えは、學校入學前に目茶苦茶に踏みにじられ、學校に入學した時は全く萎縮されてしまつてゐる。動的教育も自學輔導もあつたものではない。彼等が漸く質問を發する頃よりその質問に對して親切に答へてやつたならば、入學後の學校教育に於て如何に著しい進歩を見るかれない。現在の母たるもの、幾何が、尋常四年程度の教材を満足に指導し得るであらうか。讀方の讀み位なら兎に角、他教科に至つては子供の前に恥すべき母が大多數であることを思ふ時、母たる人は速に猛省すべきであらう。

殊に母たる者の不斷の修養が、子供の爲に如何に勉學心を向上せしめるであらう。僅の時間を割いて子供の傍に子供と共に勉學し得る母は實に立派な母である。

慈愛深い母親を去つて子供は父親につき、そうして母親を輕蔑するに至る。これは何故



であらうか。それは子供の長ずるに従つて母親の低級なことを知るからである。故に長く子供に尊敬されやうと思ふなら長く修養をつゞけて時代について行くことを心掛けねばならぬ。

最後に母たるものは自己の爲にも信仰に生きる人であらねばならぬ。如何なる宗教でもよい。兎に角信仰に生きる人でなければ、子供の精神方面の哺育は出来ない。子供をして將來道德的規準によつて生活するやうに育てる爲には、宗教並に美的情操を發揮する婦人の天性に俟たねばならぬことを考へる時、一層その必要を感ずるのである。

信仰は婦人が子供を哺育する上に大切であるばかりでなく、學校教育の不足を補ひ、家庭の日常を和らげる上にも多大の効果がある。今日の社會にも多分の欠陥があり、學校教育にも亦改良すべき點が多々ある。而しそれ等を救済し改革するよりも、もつと大切なことは女性自身の自覺である。徒らに古風を墨守して女大學式に、四角四面の箱入娘となつて清々しい生氣のない女性も困るが、それかといつて新奇を好む蓮葉であつても困る。戀

愛至上を謳歌し、愛の巢を營むことが絶対に悪いとはいはぬ。然しそれだけでは女の女として此の世に生を享けた意義がない。産兒について哺育、これは女の貴い使命であること知らねばならぬ。

内助。夫婦は融合せる温き愛の一體であつて、相互に感謝もし、奉仕もすべきものである。産兒、哺育が女子の重大なる使命である以上、男子には當然こゝに女子に對して物資を供給せねばならぬといふ義務がある。而かも妊娠から分娩までの長い間は女子は活動が出来ない。これに對して男子が物資を供給することは義務であつて、この間相互にいたはり感謝すべきで、それはなすべき當然の事をなしたので、借金を返済すべき義務があるので返済したといふやうな、しかく左様に單純な義務の履行であると考へてはならぬ。

男子は外に出て物資を得るばかりでなく、人類文化の爲に盡す必要がある。女子は内にてこれを助け、家政を整理する方が都合がよければかりでなく、外にある男子をして後顧の憂ひをなからしめ、存分にその能力を發揮せしめることが出来る。そこで内助といふこ

とは、衣食住等に關する家政の整理一切を引き受けて、夫に對する慰安者たること、理解者たること、更に共に苦しみ、共に楽しむ一切をいふのである。

衣食住等に關する家政の整理、これが爲に男子は賢明なる妻を要求する。いふ迄もなくそれが男子の活動力に多大の關係をもつことはいふまでもない。日々の食事から掃除、時々の衣服から子供の世話、來客の接待等々苦勞の多いことは申すまでもないが、それだけ女子には多方面の智識と修養とが必要である。苦勞ではあるがその苦勞から逃れてはならぬ。その爲に男子の活動が出来るのである。

而しながら家政の整理といふことは、産兒、哺育とはちがつて、その若干を他人に代らしめることは差支ない。非常に多用な場合は當然そうすることが必要であらう。殊に何等か優秀な才能を有する女子には許すべきである。優れた頭の働きによつて家政の一部を他の者に代らしめ、自己の勞力と時間を省き、その勞力と時間の餘裕を以て、自己の精神的修養乃至は夫を助けることは望ましいことである。單に女子が生殖的使命のみに忙殺さ

れて、文化的使命を怠ることは、眞に女子の使命を自覺してゐるとはいはれない。

夫の慰安者として又家庭の慰安者にして、家庭は、唯一の慰安所であつて妻は唯一の慰安者であつてほしい。文化が進めば進む程社會は複雑化して來る。そこに活動する男子は單に衣食住のみで萬足は出來ない。單に臺所の整理などいふことは末の末である。外にあつて終日劇務に従事して、疲れ果てた身が我が家に歸つて、そこに何等の精神的慰安のない程淋しい事はない。何たる苦痛であらう。悲慘であらう。

日本の家庭は古に比べて可成の紊亂をしてゐるのではなからうか。若しそうであるとしたならば、その大部分は男子の罪であるかも知れないが、而し家庭にある妻によつて何等の精神的慰安を得られず墮落しつゝある男子の多いことも見逃してはならぬ。この點から將來の女子は臺所の整理もとより大切であるが些細な事である。それよりも、もつと〜大切なことは眞の精神的慰安者となる修養が大切である。

容貌から應對振り、料理から趣味、文化生活は時代と共に細かに深まつて行く。美は女

の生命ではないか、何人か美を好まぬ者があらう。娼婦型の自然をぶちこはした白壁の様な化粧は元より論外であるが、自然に近い、適度の化粧は精神美を増すとも害するものではない。それにひきかへ、着物の着振り、髪結び、まるで狂ひじみた妻を見る夫程、不幸な者はない。慰安者となるには身だしなみを忘れる様な女であつてはならぬ。

趣味を豊にせねばならぬ、働く者、否、働かない者でも何等か趣味享樂を必要とする。

世界を通じ活動寫眞の流行はそれが爲である。勞働者が一日の勞苦を忘れる爲に活動にすることが頗る多い。文化人は一層高い趣味を要求する。食卓に一輪の花を挿し得る女、樂器によつて一曲を弾じてくれる女、多少なりとも繪畫や、文學を話せる女、時事問題の話相手になる妻を要求する。

今後女子がもつと品位ある容色を整へ、料理に堪能で、趣味を理解してくれる様になれば、男子の墮落はすつと改まるであらう。男子が女子に比して、不品行であるのは、その罪女子自身にも十分あることを知らねばならぬ。かゝる見地から女子はもつと自覺と修養

が大切であり、女子教育の任に當るものも、大いに顧慮すべきである。

更に妻は夫を理解するといふことを忘れてはならぬ。今日の夫婦間には知的能力の上に甚だしい隔りがある。この隔りの多いことは、夫を如何に苦しめるかわからない。妻は夫と共に社會文化について語り得る程度の修養が必要である。夫の親友が來訪した時、夫と共に妻は心からなる歡待をなし得る妻、よし物質的に表はさなくとも、心は夫と共に迎へる妻であつてほしい。殊に夫の職業を理解し得ない妻は、妻としての資格がない。現代生活の様々な煩悶、苦惱、葛藤を理解し得る妻であらねばならぬ。而し現在の婦人は慰めもせず、助力もせず、加ふるに夫を苦しめ、夫の職業を妨害して恥じない様な妻が多分にある。

妻は夫を理解することの大切なことは前述の通りであるが最後に精神生活を共にする妻でありたい。共に楽しみ、共に苦しみ、共に喜び、共に悲しむ、女を望む。夫の喜びを倍加し、悲しみを半減してくれる妻を望む。自分の衷心の悲しみを理解することなく、又眞

の喜びを喜んで貰へないやうな妻を持つ程不幸なことではない。夫婦間の愛情、平和、幸福といふことは、決して富や地位から来る問題ではない。精神に關する問題である。世間に赤貧洗ふが如く、共に病床に臥して食ふに物なく、飲む一瓶の藥なくとも無限の感謝と幸福を享けた人々はいくらもある。これは即ち精神生活を共にする所以であらう。

世に謂ふ「様の下の力持ち」とは、大なる貢獻はしてゐるが、それに對する地位も、名譽も、償ひも得られないといふ意であらう。これ即ち精神に生きる所以であつて女子のすべてとはいはぬが大部分は「様の下の力持ち」で、自ら償ひを求めず、地位を求めず、名譽を求めない所に精神生活の尊いところがある。それでこそ夫は、妻を信賴することが出来、活動能力を高めて共に働くことが出来るのである。「命もいらぬ。金もいらぬば地位もいらぬ男は仕末に困る。されど仕末に了へざる男ならば國家の大事を共にする能はず」といふ南洲翁の言葉は妻の夫に對する心境、夫の妻に對する心境を表現したものと考へても誤りでなす。

かく何等の報酬を求めない所に尊さがあることを世の多くの女に知つてもらいたい。勿論男子がかくある事を強要したのでは更に精神生活の本來の意義を没却することになる。

最後の言葉、産兒、哺育、内助は女の使命であることは前述の通りであるが、而しこれを誤解して女子は一步も他の事をしてはならぬといふのではない。世には大道狹しと濶歩する女、蓮葉娘のある反對に、箱入娘式な兩極端の女がある。

これ等は何れも眞に女子の進むべき道、眞の女の使命を自覺してゐない、憐むべき女である。女には産兒、哺育、内助の使命の外に、男子の出来ない尊い社會的奉仕のあることを知らねばならぬ。文化が進めば進む程、その範圍も廣められて行く、例へば、

貧民救濟の爲の

慈善音樂會、孤兒院、養育院等の如き憐保事業

文化開發の爲の

巡回講演、矯風會の如き

第五章 女子の使命

學生訓育の爲の

地方出の學生生徒の寄宿舎の世話の如き

かく考へれば、誤つた一部婦人の如く男子の仕事の領域に出しやばらなくとも、女子本來の使命のもとになすべき社會奉仕はいくらもある。而し今日の女の力量に於て、自信力に於て、確信の程度に於て、知識の程度に於て、一部人士の考へてゐるが如く向上してはいない。むしろ貧弱であるが爲に、奉仕的事業の施設經營は勿論、資本があつてもそれを利用する才知に乏しい。今後の女子はこの點にも一段の自覺と修養が大切である。

最後に女子の總べてがかゝる使命があり、その使命を果す爲に妻たり、母たり、親たることが女子の務かといふに、こゝに若干の例外を認容せねばならぬ。例へば

- 1 生理的にも精神的にも妻たり、母たり、親たる資格を缺いてゐる者。
- 2 一家の様々の苦しい事情、例へば親に代つて弟妹の養育をせねばならぬといふ様なことから結婚生活に入ることの出来ない者。

3 天才にして、妻たり、母たり、親たるの使命を果すよりも、獨身世活によつて自己の天分を發揮する方がより多くの人類の爲の幸福を増し、文化に貢獻する者。

4 結婚生活に必要な諸條件を缺くが爲に結婚生活の出来ない者。例へば愛の無いものとか、經濟的能力の無いものとか、生理的、或は精神的は結婚條件を缺いてゐる者。

以上の何れかに屬するものは、全然結婚を許してはならぬもの、避けねばならぬもの、結婚を許して妻たることは許しても、母たり親たることを許されない者等、無論事情に依り程度によつて異なるが、大體産兒、哺育、内助の使命を結婚によつて果し得られないのである。かゝる女子は最も同情すべき女子であつて、かゝる女子こそは、産兒、哺育、内助以外の尊い社會的奉仕事業に向つて幾分たりとも貢獻するの覺悟が大切である。

第六章 女性の體育

最近一般體育の勃興につれて、女子體育なるものが論議されるやうになつたことは、女子そのものゝ幸福は元より、國家將來の爲めに極めて意義深いことゝいはねばならぬ。

彼のスタンレーホール氏は、「婦人の健康は、種族の安寧幸福に重大なる關係を有するものであるから、その健康問題は男子以上に必要である。」とまで唱へてゐるのも過言ではない。

而してその女子體育なるものゝ目標は種々雑多である。或る者は我が國現時の女子がかかる風體をなすに至つたのは、由來男子のみが活躍して、女子はその日蔭に育まれた結果である、今や日本の女子は男子と同様世界の檜舞臺に立つて活動しなければならぬ。それには男子と同様な體育法が必要であり、女子と雖も行らせるならば、男子と同程度のことが出来る。その證據には近時世界の檜舞臺まで乗出した女性があるではないかといひ、或

る者は、今日の女性の體力は男子に比して著しく劣つてゐるから、女性の獨立準備行爲としての體育向上を叫ぶものもある。或る者は將來の賢母良妻たる資格を得しめんが爲に女子體育の必要を高唱し、或る者は萬一の場合を豫測して、それに役立たせやうとの考から女性體育を主張し、或る者は男子を軍人にするが爲に鍛練するが如く考へる結果、女子には強い軍人を産ませる爲めに女性體育を強調せやうとしてゐる。

女性體育の眞使命、かくて女性の體育目標が雑多であるだけ、今日の女性體育は眞にその使命を果すべく進んでゐない。由來女性體育の目標は、萬一の場合に役立たせる爲でもなく、又男子にとつて代らせる爲めでも、立派な軍人を産ませる爲めでもない。女性體育の眞使命は、前章に述べたるが如く、女性には女性としての特殊な使命がある。その女性本來の使命を果し得るやうな立派な女性をつくることにあらねばならぬ。或る論者は「女子が美術家となり、雄辯家となり、教授となり、若しくは名人となることよりも、一個の婦人となることがどれだけより完全であり、より至善であるかわからない」と述べてゐる

のもその邊の消息を雄辯に物語るものである。

彼のドクターマツケンジー氏は、「女性の修練は、成育、均合、言語、姿勢、衣服の點に於て、女性固有のものを發達せしめねばならぬ。男女間の解剖生理、心理的相違を無視してはならぬ」といつてゐるが如く、女性の體育は男子と同様になすべきものではない。女性としての本來の使命を遂行するに不都合なき、女性固有の體型の美を極度まで發達せしめ、女性本來の性情を圓滿に伸ばして、女性らしき發達に重きを置かねばならぬ。

世の數少き女子體育専門學校に行つてゐる方法を、女性に合理的な方法として、そのまま直ちに普通の女性に課することを是認するわけには行かぬ。彼等は體育を職業とするものであつて、職業の爲めに或る程度まで自己の身體を犠牲にしてゐるのである。従つて彼等の體育法は、彼等自身の爲には善良であらうが、將來女性らしき發達を遂げんとする若き女子に對して普及せしむべき方法ではない。尙又世界の檜舞臺に立つた小數の女性の如く、圓盤を投げ、槍を投げ、或はランニングに於て、新レコードを作ることが必ずしも女

性體育の目標でないことも明瞭である。彼等は我が國に於ける或る意味に於ての特別の偉人であつて、我が女子體育界に劃期的刺戟を與へたことはその勞を多として特筆すべきことであらう。而しかゝる女性を續々輩出することを目標としての女性體育の振興を圖るならば、女性本來の使命と職能を忘却せる憂ふべき女性體育であつて、人類の進化を妨げること甚しきものといはねばならぬ。

女性の體育は、何處までも女性本來の使命に立脚して、女性固有の體型と性情とを圓滿に發達せしめ、完全なる女性をつくることを目標として進まねばならぬ。

社會生活より見て、古代に於ける無智蒙昧な亂婚時代に於て、子を産むといふことが男女の關係に據るといふことを知らなかつた時代は兎に角、少くとも家庭生活を營むに至つては、女性は子を産み、これを哺育することの責任を感じて家庭に止まるやうになつてからは、男女その責任を分擔して、一家の經營に協力することゝなつた。この間一面に於ては、女性は男性の保護のもとに家庭の内部的經營、即ち内助の責めに任じ、他面に於ては

眞に女性としての非常に高尚な發達を遂げたことは、洋の東西を問はず同一の経路を辿つてゐる。

かゝる點から考へても女性の體育は、女性の向ふべき性能を認めて、それに適はしい體育手段を講じなければならぬ。殊に今日の如き經濟状態に於ては單なる理想のみでなく、吾々の眼前に見せつけられてゐる現實の女性生活を十分考究して、これに適合する體育法なり、手段なりを講じなければならぬ。

生物學上より見て、此の宇宙に存在する所謂生物と名のつくものは、最下等のものから最高等のものに至るまで、詳細に觀察を下すならば、そこに下等なものから高等なものに進むに従つて、性の分化を判然と認識することが出来る。同じ地球上に生存する人類であつても、文明の方が遙に性の分化が行はれ且つその認識度の異つてゐることは何人も否定することは出来ない。所謂性的分化は、生物は勿論、人類生活に於て高等なる發達を遂げてゐるといふ證左に外ならない、この性的分化といふことは、いひ換へれば進歩した文

化人といふことの一條件である。

この性的意義を無視し、女性の本質を認めることなく、男性と同様な體育法を女性にまで適用し、しかもかくすることが當然の事であり、立派なことであるかの如く考へてゐる女性の無自覺さには誠に氣の毒の感に堪へない。

かくの如く男女平等な體育手段によつて、同一律の方向に日々進みつゝある我が國現時の體育は、人類文化の退歩にあらずして何であらうか。折角吾々の祖先が懸命につくり出した今日の文化をして、蒙昧へと誘ひつゝあるかの如き學校體育、殊に女性體育を見る時吾々教育者は十二分の反省をしなくてはならぬ。

遺傳學上より見て、遺傳學の教ふる所によれば性の傳達にあつては、その性は異性である所の子を通して、同性である孫に傳達して行くといはれてゐる。若しこの學理を信じ、單なる一個の人間が男であり、女であり、表面に表はれるものによつて、男ともなり、女ともなつて居るのであつて、事實は男と女の混合種に外ならない。若しその潜在的に有つ



て居るものを性的に傳達するものであるといふことを信するならば、女性の體育は當然そこに基礎を置いて考へねばならぬ。若しその基礎的條件に關する考慮を缺いての體育であるならば、それは性的立場から見て何等の意義のない體育であるといはねばならぬ。

心意方面より見て 女性は一般に感情に激し易く、これを抑制する理性の力に乏しく、團體精神とか競争心とかいふ精神作用が男子のそれの如く旺盛でなく、勿ろ引込主義、個人主義的傾向が多分にある。一方同情に富み、細心な注意力を有し、美を好み、禮讓の心に厚いのは女性の特徴である。これ等の精神作用中特に感情は、春機發動期に入つて激變するものであるから、この期の精神體育といふ立場からも女性には別個の取扱ひが必要である。

生理解剖上より見て 男女は生理解剖上より見て全く別個のものであることはいふまでもない。殊に春機發動期に入る一年前より男女は身體的にも、精神的にも著しい變化を起すもので、特に女性は、女性としての身體的特徴として、その形態的特徴や機能的特徴、

乃至は體力、血液、肺活量、血壓等が著しく女性化し、いはゞ子供が大人に變る時機であつて、この時代の體育法こそ最も注意すべきものである。今日の女性體育が如何にこの期に於ける周到なる注意を誤つてゐるかについて一二の例を掲ぐるならば、

(一) 昭和八年八月二十三日讀賣新聞掲載(岩田博士談)

卵巢の働きに障害 その中で特に目立つのは彼女(女子選手のこと)等の月經狀態が、同じ年齢の女學生に比べて非常に悪いことです。職業婦人、特に女工さんなどの一般婦人に比べてよくないことは既に認められてゐるのですが、その女工さん以上に悪いのです。どのやうに悪いかといふと、月經といふもの、根本である、卵巢の働きが障害されてゐるのです。それがひいては將來の生殖能力にも勿論影響しないわけはありません。外見は彼女等の體は非常に丈夫に、完全に發育してゐるやうに見えても、婦人の天職を遂行する上にはむしろ不完全な彼女等です。外國ではどうかと云ふと、ドイツ一流のスポーツ選手を見ると、その月經狀態はやはり多少よくないやうですが、しかしそれはほんの僅かです。

青春期直前の運動 ではなぜそんなに悪いか、それには二つの原因があるやうです。一つは日本の女子選手は非常に早くからスポーツをはじめ、従つて選手になるのも早いこと、現

在の各學校の選手の八割は、月經のはじまる前から選手になつてゐます。丁度女子の青春期に入るすぐ前といふ時は、非常に大切であつて、若しこの時分體を過激に使ふとか、又は病氣をするとか、榮養が衰へるとか……といふやうなことがあると「その影響はまづ生殖器に及ぼします。従つて青春期に入かけの時分に過激なスポーツをするといふことは、少くとも生殖器の發育に悪い影響を來たすことは當然だと考へられます。

月經中も運動繼續　もう一つの原因は、日本の選手は月經中にも練習をしたり、競技に出席したりするものが非常に多いこと、現今の選手で月經中しない人はその二割にも足りない、残る八割以上は平常と同じことに、或は多少ひかへめにするといふくらいなのです。月經中は心身の安靜を守ることが絶対に必要です、過激な運動によつて種々の障害の起り易いことは云ふまでもありません。日本選手の月經中することによつて、一時的にせよ、永続的にせよ、障害の起ることは想像にたくありません。

## (三)

昭和八年四月二十六日(東京朝日新聞掲載)

私の調べたのは選手を中心に四百十八名の女子である。この調査によると我が國の女子のスポーツに參與し始める年齢は甚だ早く、十四歳までの者が八三・二パーセントに及び月經來潮

前既にこれにたづさはつた者八六・七パーセントで、十四歳未滿で選手になつたものは八六・九パーセントの多きに及んでゐる。これ等スポーツ女子の月經來潮時期は、一般女學生とは同じであるが、その月經が極めて不順である。松山、辻、石川諸氏が調査した一般女學生の月經來潮不整なるものは三二・六パーセントから三七・九パーセントであるが、スポーツ女子は五〇・六パーセントもある。又月經中苦痛を訴へる者は、一般女學生にあつては種々の人の調査から見ても三八・〇九パーセントから四八・三九パーセントであるのにスポーツ女子で、下腹痛とか腰痛、頭痛その他苦痛を感じる者五六・三三パーセントもある有様である。而もこの苦痛を訴へる者には現在運動をしてゐる者よりも過去に烈しいスポーツに參與したものに多くなつてゐる。この様に調べて來ると、スポーツ女子は一般女子に比べて月經不順、又は月經困難なものが甚だ多いといふことになり、従つて之れは卵巢の働きがによく受胎能力が欠ける恐れがあるといふことになる。だから私は現在の様に十四歳位の年迄にスポーツを始め、しかも選手になるため激しい努力をするなど、いふことはさけた方がよいと考へるのである。何故かといふと女子の十四、五といふとこれから身體も大きくなり、太つてくるといふ第二期に入らんとする時である。この時激しい運動をしてその方にエネルギーを取られ

ることは考へものである。日本婦人の完全な發育は倉敷勞働科學研究所でも、私のいろ／＼の調査からしても満十八歳である。故に理想的にいへば十八歳以後からスポーツをやること  
がよいけれども、不可能であるならば、月經が始まつて半年か一年經過し、順調になつて始  
めてスポーツに參與することをお勧めいたします。

かくの如く女性の過激な運動は此の期に於て特に注意すべきである。

女性活動の上より見て 往年歐洲大戰の際、各國の女性殊に獨逸の女性は目醒しい活動  
をした。その活動範圍も女性本來の活動範圍でなく、男子の領域に進出して男子に勝ると  
も劣らない活動したことは、當時の新聞、雜誌にしば／＼報道され、何人も驚異の眼を見  
はつた。而して活動そのことのみ考へれば誠に結構なことであつたが、戰終へてそれ等の  
女性が家庭にかへり、家庭の人となつた後の狀況は、獨逸國民の爲には勿論、世界の女性  
の爲めに、女性が男性と同様に活動することの不幸を如實に警告してくれたことは吾人の  
腦裏に今尙明瞭に刻みつけられてゐる。戰場に於て、否銃後の婦人として、男性以上に活

躍した、彼女達が家庭に歸り、母となつた時、その子供の多くは虛弱であつた。病身であ  
つた。不具であつた。活動量の多かつた婦人程その子に與へた結果は不良であつたことは  
すべての學者の證明する所である。この事實を見る時、女性をして男性と同等に活動せし  
めんとし、同等の體育を課せんとすることが如何に將來の國民に惡影響を及ぼすかを考へ  
ねばならぬ。

かく種々なる立場より女性の體育は、男子と同一律になすべきものではなく、女性本來  
の使命に立脚した妥當なる體育法であらねばならぬことは何人も肯定し得るであらう。更  
に女性體育實施について、最も意を用ふべき事項を摘記するならば、

1 女性は男性の如く、強い力とか、機敏に訓練された身體といふことよりも、永續的  
な力を必要とし、特に機敏な四肢の活動を必要とする。

2 女性は成長するに従つて身體が肥滿し、靜的になり、脂肪が沈着し骨盤が擴大して  
男子の如き激しい運動を行ふに堪へない状態に置かれて來るから、男子よりも程度

の低い運動が大切である。

- 3' 女性は男性よりも身體弱く、疾病に罹り易く、爲めに強き運動を課する時は、潜在せる病氣を誘發し易く跳躍、疾走の如き強き運動は往々過勞に陥り易い。尙女性が春機發動期以後に於ては、同年齡の男子に比して死亡率の多いことに注意せねばならぬ。

- 4 女性の月經中は血行を盛んにし、筋力を活動し、精神を興奮するやうな運動を避けねばならぬ。

- 5 強力運動に對しては、女性の天賦の性能を果すに適當な程度の運動を標準として課すべきである。

- 6 女子は優美、禮讓等の徳性が大切であるから、この徳性を破壊するやうな運動を避けるは勿論、姿勢を正しく保ち得るものを選びねばならぬ。

- 7 力とか、勇氣とかいふことよりも、一層容姿、表情及び優雅の完成に向つて努力す

べきである。

- 8 柔軟な優しい運動、腹筋の運動、呼吸運動、平均運動等は最も多く課する必要がある。

- 9 競技運動に用ふる服装は、腋窩、乳房、腰部、大腿の上等部の肉體を透視し得る物は絶対に使用せしめてはならぬ。殊に短いパンツ、薄物華美なるもの又は華美ならずとも他人の注意を引くやうなものは使用を避けねばならぬ。

- 10 地方の狀況を考慮し、悖風美俗を害するやうなものは絶対に課すべきではない。

以上は女性體育上特に注意すべきことであるが、要するに女性の體育には解剖、生理、衛生、心理等の教ふる所に基き、女性本來の性能に適應し、その健康を増進し、且我が國固有の風俗、習慣を考慮して、而も女性の缺陷を救済し、長所を益々發揮せしむることに最善をつくすべきである。

勿論女性と雖も合理的な練習の如何によつては男子以上に進歩するものであるが、材料

の撰擇にあつては、能、不能といふことよりも女性に適、不適を考へねばならぬ。尙運動實施の原則としては、

- 1 困難な運動を數少く行ふよりも、容易な運動を多く行ふこと。
- 2 同一姿勢を長く保たすよりも、短くても正しい姿勢で行ふこと。
- 3 呼吸、血行に十分なる注意を拂つて行ふこと。
- 4 自然的な表情を發露する柔軟な運動を撰ぶこと。

而らば女性的取扱を何時頃より開始するかは問題である。由來男女の性別は胎内四ヶ月にして定まるものならば、理論的にはその時より女性としての胎教が必要となるわけである。而しその性の判別は普通人では出生しなければ判明しないし、よし判明したとしてもその當時より女性的取扱をするといふことは議論の末である。従つて私は小學校入學後に於ける性別取扱ひについて一言したいと思ふ。

世間には小學校に於ける性別取扱ひについての二つの議論があるやうである。一つは性

別取扱ひをすればかへつて兒童をして早熟せしの性別化を速かにするから弊害があるといふ。一つは性別化は必要であるが、その性別化をする時期に異論があるやうである。これ等は共に當を得たものとは考へられない。私は男女一律に取扱ふ中に女性特有のものを尋常一年より漸時加味する度を多くするといふ取扱ひを主張するものである。尋常一年より男女別にする必要は勿論ない。殊に今日のやうな社會制度のもとに於ては實施が不可能である。

故に一時間の授業中女性特有の材料を加味して行ふといふ程度に始め、次第にその量を増し、少くとも尋常五年以上に於てはその大部分を女性的のものに仰ぐといふ取扱ひが最も行ひ易く且妥當な進み方であると思ふ。

第七章 今後に残されてゐる諸問題

吾々は國民教育の基礎をつくるのであるから、出来るだけ眼を多方面に向け、周到なる思慮をめぐらし、且つ純粹に統一した普遍的で而も妥當的價值をもつた理論であり實際であるべく研究の歩を進めねばならぬ。従つて吾々の研究は穩健でなければならぬ。周密でなければならぬ。多分の妥當性をもつておらねばならぬ。不斷でなければならぬ。一歩一歩と進歩的でなければならぬ。

自分の好き好みによつて極限された一小部分を強く主張するのみで、他の多方面を忘れてはならぬ。小範圍の而も偏した主觀にとらはれての獨斷であつてはならぬ。歴史に鑑みて將來を慮らなければならぬ。現時の體育界の人々、特に初等教育に於ける體育の指導者が果して以上の様な事に意を拂つてゐるであらうか。私は誠に心細い氣がしてならぬ。

試みに體育の眞意義の上に立つて靜かに現状を考察するがよい。積極體育の高唱、これ

はもとより大切である。而しそれ等の人々が積極と相俟つて消極方面の體育を等閑にしてはゐないか。競技主義もよい、レコードを高むるのも、優勝旗や優勝盃を増すもよい。而しそれ等の人は他の教材の特質を忘れてはゐないか、體育の對象を忘れてはゐないか、體育萬能もよいが、教育上に於ける體育の位置を意識してゐないのではなからうか。解剖主義、生理主義もよからうが心理的根據の必要はないか、末梢的に、部分的に進むこともよからう、而し體育の総合的價值を放棄してはならぬ。

體育の理論は時々刻々深味へと進み、新らしいと名乗る體育の實際指導は日々に出現する。而し眞にして正なる體育の指導が幾何あるであらうか。何れも體育本來の目的と餘りかけ離れた方面に、分拆的に伸展した理論や實際が行はれつゝあるではなからうか。こゝう考へる時、現時の體育界には吾々の眼前に體育上重要な問題がおびたくしく今後に残されてゐる。それ等の問題の中には吾々の先輩が永年苦心努力研究の結果尙未解決のまま存続してゐるものもあれば、時勢の推移と科學的研究の結果新しく産れ出たものもある。

吾々實際家の研究はこれ等數多き體育上の問題の總べてに關係づけられておらねばならぬ。これ等の總べてを考慮した上の體育の理論であり體育の實際であらねばならぬ。私は今吾々の眼前に今後に残されてゐる體育の諸問題の概略を擧げて、讀者と共に一瞥してみたいと思ふ。

先づ第一に學校體育の根本問題としての、

- 1 教育と體育との關係論
- 2 體育の本質論
- 3 體育の目的論
- 4 體育の範圍論
- 5 體育の手段論
- 6 體育の對象論

等がある。これ等の問題は相等に研究されてゐる様であるが、まだ研究すべき部分を多

分に持つてゐる。

試みに現在の體育界を眺めてみると、輕々しくも、各々それ／＼の信條をふりかざして論陣を張つてゐる。論陣だけならまだしも何等確たる信念も持ち得ず、他を屈服せしめ、或は満足せしむるだけの根據もなくして、やれ體操主義、やれ競技主義、やれ舞踊主義、やれ解剖生理主義、やれ選手主義、やれ何々と水に漂ふ浮草の如く世間の流行に右往左往し、兒童の心身に不良の影響を及ぼしつゝあるのではなからうか。吾々實際教育者は、國民體育の基礎を確立する上にも、又一般民衆體育の向上を圖る上にも、これ等の問題は是非とも解決しなければならぬ重大な根本問題である。これ等の問題を解決しないで行ふ體育は砂上の樓閣に何等變らない。

次に學校體操要目の運用に關する問題として、

- 1 教材の量に關する問題
- 2 各教材の特質に關する問題

- 3 教材配列に關する問題
  - 4 各教材の分量と配合に關する問題
  - 5 時間割に關する問題
  - 6 地方化に關する問題
  - 7 教材の指導法に關する問題
  - 8 要目教材以外の教材選定に關する問題
- がある。これ等は直接吾々が實際作業に關係する問題で、吾々の研究によつて吾々の力によつて解決すべきものであり、解決し得るものである。
- 尙又教材を取扱ふ主義の問題として、
- 1 體操主義……は技術主義、鍛練主義によつて進まんとしてゐる。
  - 2 教練主義……は訓練主義より劃一主義によつて進まんとしてゐる。
  - 3 舞踊主義……は藝術主義によつて進まんとしてゐる。

- 4 遊戯、競技主義……は興味主義より選手主義に進んで、一部選手に運動場を獨占させ、學業を犠牲にし、他校との競技によつて得た勝盃や、優勝旗をならべて悦に入り、レコードを高めることを唯一の目標としてゐる。
  - 5 解剖生理主義……は人間を器械と同一視して、科學の力を借りて能率さへ高まれば體育が向上したと一人よがりをしてゐる。
  - 6 積極主義……何でも運動さへすれば體育であるかの如く考へ、體育の共同作業である消極方面を無視し、教室内に於ける學習の姿勢がどうあらうと、校舎の塵垢がどうあらうと、そんなことは一向気にしない。
- かくの如く體育本來の綜合的價値を忘却して、極く一少部分の枝葉末節に汲々することをして、さも進んだらしい仕事をしてゐると考へてゐる者こそ笑止の沙汰である。正常に而も純眞に伸びやうとする兒童の心身は次第に撓められ、次第に異常の方へと進められて行くことを考へると、毒にも藥にもならなかつた以前の體育の方がかへつてましたとさへ



考へさせる位である。

こゝに目覺めた人達によつて

7 並進主義……の體育が唱へられ、積極的體育教材を平等に併用し、而も消極方面の體育を併行して行かねばならぬといふ頼母しい叫びがあらゆる方面にあがつて來たことは喜ぶべきことである。

以上の取扱ひは、すべて極限された小範圍に立ち、偏狹な主觀にとらはれて各教材の本質を過重視した結果起つた問題であるが、それとは全く異つた方法上の問題もある。

最近の教育思潮として自由とか、個別とかいふ兒童心理學の立場から起つた問題がそれで、従來の教授といふのはよくない學習でなければいけないといふのが即ちそれである。教育は所謂教授では駄目だ、兒童自らの學習でなければならぬ。教師はそれに都合のよいやうに環境を整理し、指導をすればよいと唱へ、更に進んで、兒童と教師とが相提携して向上すればよい。共に伸びればよいといふ新主義、新主張が擡頭して、それが體育の上に

も波及して來た。即ち、

- 1 自覺學習
- 2 個別學習
- 3 相互學習
- 4 共同學習

などがあり、教師の立場から見ると、

- 1 自由的取扱
- 2 個別的取扱
- 3 分團的取扱
- 4 劃一的取扱
- 5 季節的取扱

などがある。こうした中の、或るものは教師の袖手傍觀に都合よくなり、或るものは一

部強壯なる兒童が運動場を獨占するの好機を與へ、或るものは參觀人本位となつた。

これ等の中何れが體育の本質から見て、眞にその生命を發揮するに最も適當した方法であらうか。それとも他に新しく生れ出ねばならぬのであらうか。こうした究明こそは、極めて切實な、而も緊急な問題であつて、吾々は力の限りを儘して最も眞摯な態度で考究しなければならぬ。

而るに現時の我が教育界は、教材の本質を究明することなしに、少しでも毛色の變つた方法が唱へられると直ちにその形を取り入れて、天暗れ新進教育家を以て自ら任じてゐる。そうしてそこに大なる缺陷を生じ、蹉跌を生み、寒心に堪へないやうな破壊を敢へてしながら平然としてゐるのを憂へずして何を憂へよう。伸びんとする兒童は芽をつまれ、葉をもぎとられ、枝を撓められてゐるではあるまいか。

次に實際的取扱の準備上の問題として、

1 指導案（教案）の是非

2 指導案の形式及内容の範圍を如何にすべきかの問題

3 指導案といふ名稱に關する問題

などがある。

正課時間内の體育運動に關聯して、正課時間以外の運動に關する問題として、

1 正課外運動の價值論

2 正課外運動種目撰定に關する問題

3 正課外運動指導の是非

などがある。これ等は體育の向上を圖る上に當然考究すべき重要な問題であるにかゝらず一向注意されてゐない。

正課及び正課以外の運動に附隨して、

1 運動會その他各種競技會に關する問題

2 選手に關する問題

## 學校體育と女性體育

- 3 賞品に關する問題  
がある。更に一步を進めてみると、
- 1 女兒及女性の體育問題
- 2 服裝問題
- 3 春季發動期の體育問題  
などがある。

以上の問題は何れも吾々實際家の力によつて解決し、正しき體育道の建設に向つて進まねばならぬ。

更に眼を轉じて見れば、學校體育の内容を名稱の上に現はす爲に名稱論として、

- 1 學校體操科の可否
- 2 學校體育科の可否  
がある。

これ等の問題に關係づけられて、

- 1 小學校令施行細則第十條の改正
- 2 體操科教授時數の適否
- 3 一時間の長さの問題
- 4 他教科等の關係(時間割)  
などがある。更に

- 1 體操要目制定の是非
- 2 制定の意見
- 3 現要目の長短論
- 4 現要目と新體操との關係  
等がある。これと相俟つて體操科の國定教科書制定に關する問題がある。
- 1 教科書使用の可否論

- 2 教科書編纂の可否
- 3 編纂するとして、教科書の内容、形式、範圍、程度等に關する問題
- 4 適用學年の問題

がある。これと必然的な關係のある教科書に關しても略前同様の問題がある。而しこれは國家の制度に依るものであるから即時彼是し得るものではない。更に百尺竿頭一步を進めて見ると、消極體育方面の問題として、

- 1 教科の衛生
- 2 口腔衛生
- 3 性慾衛生
- 4 兒童衛生
- 5 家庭衛生
- 6 豫防衛生

などがあり、これ等と密接な關係をもつてゐる、

- 7 教員衛生
- 8 使丁衛生
- 9 疲 勞
- 10 四季の感作
- 11 授業時間の數と量
- 12 家庭作業
- 13 冬及夏の長休
- 14 教室の廣さと兒童數
- 15 學校給食
- 16 食堂及浴場衛生

- 17 流行病豫防
- 18 身體検査
- 19 體力検査
- 20 虚弱兒の取扱
- 21 遺傳

等々數多の問題が吾々の作業の前に横はつてゐるかと思へば、一方設備上の問題として、

- 1 學校の位置
- 2 敷地の地質
- 3 建築
- 4 教室
- 5 換氣
- 6 採光

- 7 掃除
- 8 便所
- 9 手洗場
- 10 机及腰掛
- 11 湯(水)呑場
- 12 教授用具
- 13 體操場
  - イ 屋内と屋外
  - ロ 兒童數と廣さ
  - ハ 屋外運動場の位置、地質
- 14 體操機械
  - イ 質

第七章 今後に残された諸問題

- 15 體操機械室
- 16 體操研究室

圖書、掛圖、標本、模型、器具、機械等、直接、間接重要な問題がいくらかもある。

- 17 救急處置室

これ等は徐々に吾々實際家、學者、施政者、篤志家等の協力相互の上解決すべき問題である。

更に全體育の向上進歩を圖る爲めに、

- 1 學校看護婦
- 2 學童診療所
- 3 特殊（體育方面よりの）學校並に特殊學級の設置、
- 4 學校醫

- 5 體育指導員
- 6 女子體育指導員
- 7 體育主事
- 8 體育局官立體操學校

等の問題がある。これ等の中特に考究すべきものは、學校醫と體育指導員である。

學校醫の中には有名無實の者が多い。單に四月の定期身體検査をやればそれで事足れりといふ様な學校醫が少くない。いはんや學校體育を眞面目に考へてゐる學校醫と來たら極く稀れである。これでは消極方面の體育を向上させるといふやうなことは容易でない。殊に指導員は直接學校の監督官廳に配屬してゐる關係上可成その勢力がある。その勢力のあるといふことは、やがてその教科の成績を向上する上に相當大切なことである。而るに世の指導員の多くは自己の好き好みや、得手不得手に依つて偏した指導をする。これは指導員の交る度毎にその流が異つたり或種目が特に盛んになつたりすることによつても明瞭で

ある。

かやうな指導員や校醫によつては到底正しい體育の向上は望まれない。従つて學校醫と指導員については、その數と質とを十分に考究する必要がある。

更に學校體育と相關的に研究すべき問題として、

- 1 青年訓練所の體育と學校體育
  - 2 青年會處女會の體育
  - 3 都會地と農村の體育
- などがある。

以上すべての問題は、一として重大でないものはない。勿論これ等の問題の中には吾々實際家の力のみによつて解決される問題もあり、學者、施政者、一般國民との協力によつて解決される問題もある。何れにせよ、眞にして正なる體育道が建設されるならば、これ等の諸問題の大部分は解決され、吾々は目標を明瞭に意識して完全な統一のもとに體育の

眞諦に向つて突進することが出来るであらう。これ等の體育に關する問題も時代により、場所によつて異なるもので、元より一定不變のものでなく又何時の時代にでも絶滅するものでもなからう。而し今日の如く多岐多様ではなく、眞に體育の本質的價値を發揮し、その向上の爲めにのみ碎心すればよい時代が必ずや將來に來ることを豫測するに難くはない。

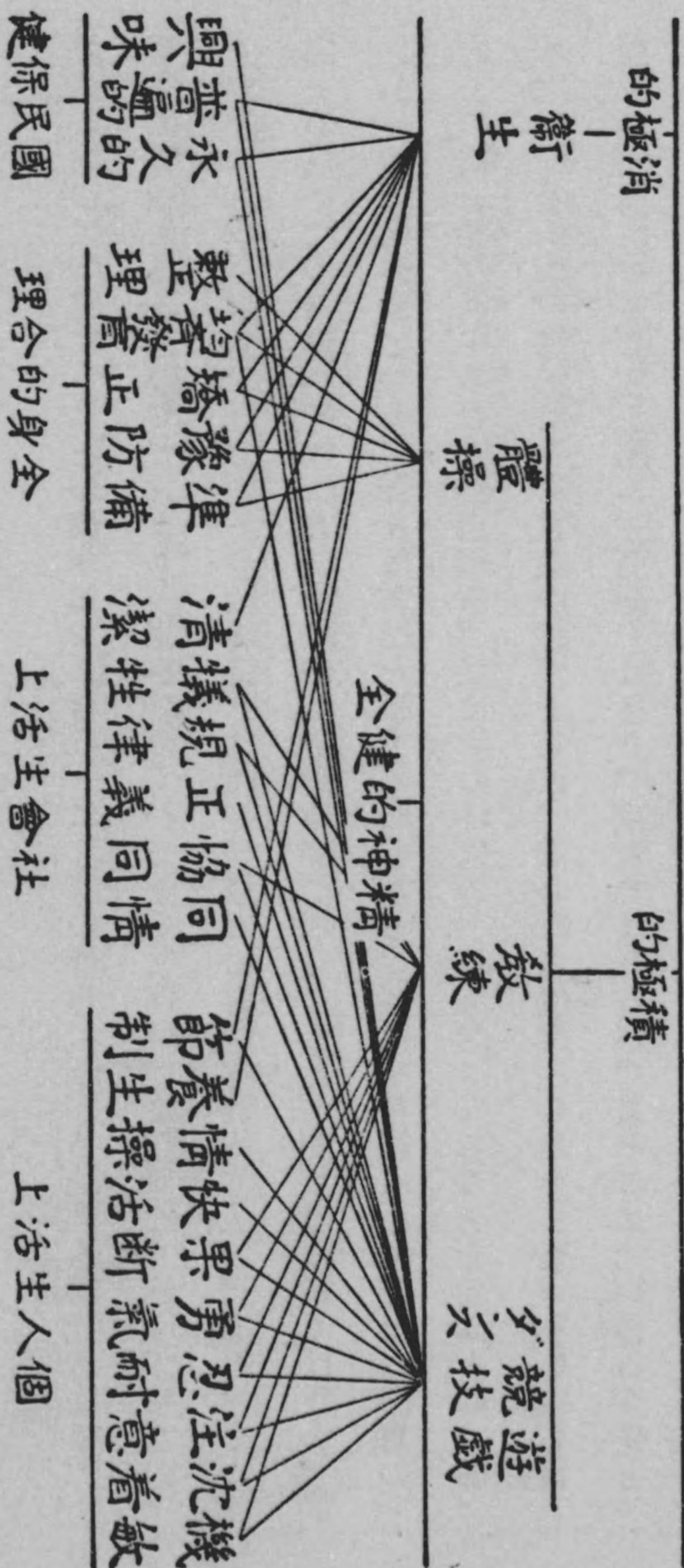
かゝる時代が來てこそ、吾々は右顧左眄することなく、ひたすら眞にして正なる體育の向上の爲めに邁進することが出来る。私はその時代の一日も速に來ることを希ふものである。かく希ふ時、眞正なる體育道の建設と共に、その教育的陶冶の使命が吾々初等教育實際家の雙肩にあることを思ふ。至難ではあり、重大ではあるが、又そこに光輝ある責任と歡喜を覺へずにはゐられない。

吾々はあせらず、倦まず。迷はず、街はず、一步／＼前後に、左右に熟慮して、眞に人をつくる爲の體育道の建設に向つて勇敢に進まねばならぬ。

最後に學校體育の目標に到達する過程を表示して筆を擱く。

### 成完人個のてしと氏國

(る依に助扶互相)



### 育體性女と育體校學

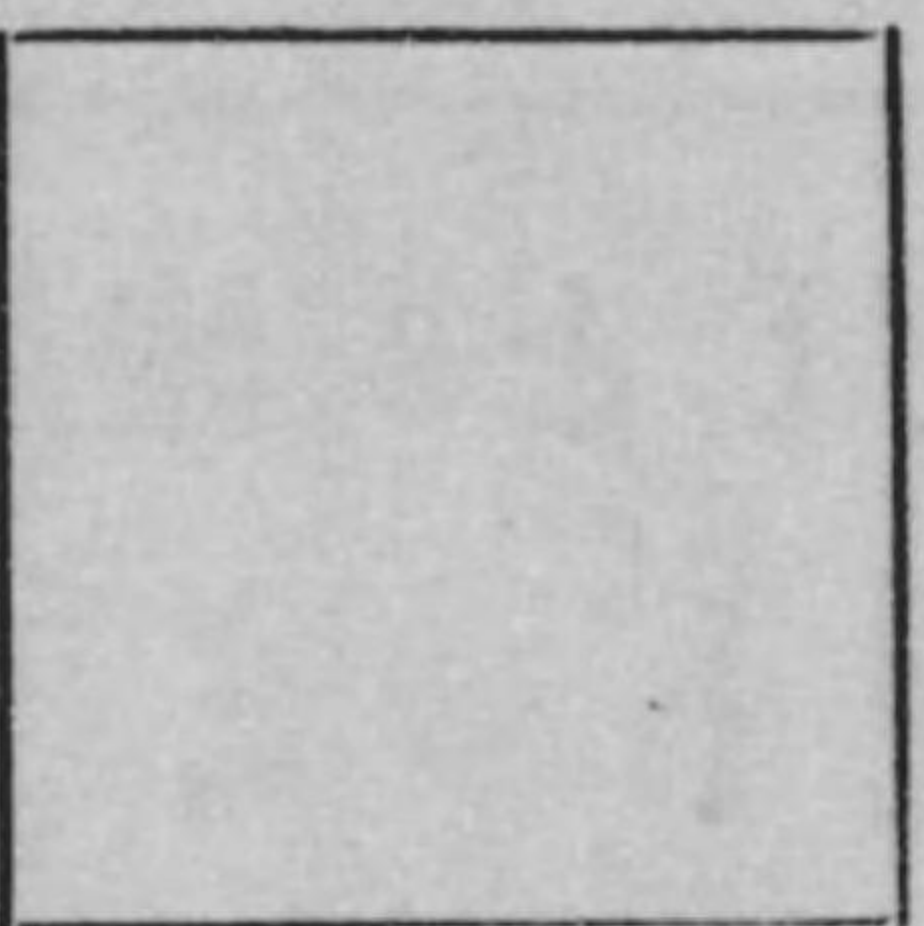
著者	小 瀬 峰 洋
發行者	三 上 源 次 郎
印刷者	栗 原 榮 松
印刷所	栗 原 印 刷 所

【定價金壹圓】

— 送料金六錢 —

昭和九年四月十一日印刷  
昭和九年四月十五日發行

三三三



東京市本郷區眞砂町十五番地

發行所 文 書

振替東京六二三〇





著共ドーヤチリ・ーリエチマ  
譯作精木高

のてしと操體用應  
說圖ドゥミラピ



見よ!!千變萬化・興味湧然たる集團體操!

ピラミッドは競技にあらず、舞踊にあらず、又純然たる體操にもあらず、即ち藝術と科學を基調とし、然かも興味津々として盡くすることなく、且つ體育活動と創作的才能を涵養する有益なる應用的集團體操である。……故に本書は……

運動會用としてステージ用として

◇獨指唯一無二の寶典!

内容興味津々二百廿  
一の挿圖に依り解説  
菊判美裝幀  
定價金壹圓八拾錢  
郵送料金拾錢

大好評!! 熱狂的賣れ行き!!

江馬春齡・高木精作共著  
小學校 體育衛生講話の實際  
四六判布製 定價金壹圓六拾錢  
二百五十頁 郵送料金八錢

本書は廣く世界各國に於ける兒童の體育衛生を研究し、多年實際教授の深き體験に基き、豊富重要な資料を以て小學各學年別に從ひ、之れを系統的に説き及ぶるのみならず、實に本書は兒童の體育衛生に於ける教授材料の年中行事鑑である。小學校體育衛生に於ける教員にも又必要なる寶典である。

獎健會主事 出口林次郎著  
運動哲學  
菊判五四〇頁 定價四・二〇 送料・二二

△本書は人生と運動、人生と體育、人生と競技、運動の特質、且つ科學的スポーツの自然の進展並に國際性等につき系統的に論じ、實に著述して前人未聞の根本的解決を與へたる大著である。尙學校・圖書館・軍隊等には必備すべき寶典なり。

獎健會主事 出口林次郎著  
世界體育史  
菊判五〇〇頁 定價四・五〇 送料・二二

△我國唯一の世界體育史! 本書出で、初めて世界各國に於けるスポーツの變遷發達に亘り古代より現代に至る世界各國に於ける研究家にとりて絶好の參考となるべし。著者多年苦心の蒐集にして何れも

ヨセフ・ヴァイツアラ原著 出口林次郎譯  
陸上競技と調和體操  
四六判 定價・八五 送料・〇六

△勝利の榮冠は全身調和の眞理を體得せる者にあり! 本書は獨逸の目下同大學々生問及及び一般競技家間に専ら參考に用ひられ、ある良書である。出口先生は我國の陸上競技家にも推奨すべき良書たるを痛感し、茲に譯述せられたるものである。運

進藤孝三著  
理想の體育設備と用具設計  
四六倍判 定價二・五〇 送料・二二

△内容は體育設備・校庭と體育用具・校庭と教場・體育用具・競技用具・遊戯用具の設計に關する規則・材料・防衛法その他を詳述し、設計の宛らば精細なる設計圖と相俟つて直ちに採りて、實にも臨機應變の設計を爲し得べく且つ優品の製作者ならしむ。實に本書は設計製作の好指針なり。

井上秀子校閱・中村榮代・中村壽松共著  
新家庭看護法  
菊判四六二頁 定價・三五〇 送料・一六

△本書は臨床治病上の理論を基礎として看護の實際を研究し、各疾病に適切なる食物の獻立と調理法をも述べ、眞に合理的なる實際の家庭看護法を詳述す。説明は數多の挿圖と相俟つて、易切な旨とし、誰にも臨機應變の設計を爲し得べく且つ優品の製

東京高等學校教授 森本竹城著  
**清朝儒學史概説**  
四六判五〇〇頁 定價三・二〇 送料・一四

文學士 坂井衡平著  
**日本國民性の史的研究**  
四六判四〇〇頁 定價三・〇〇 送料・一四

陸軍大臣 林大將題字 細越孝一著  
**仰げ 軍旗**  
四六判四〇〇頁 定價二・〇〇 送料・一四

熊本師範學校教諭 永原與藏著  
**手工科・工業科 木工教材大成**  
菊判七五〇頁 定價六・五〇 送料・二二

東京高師範前教授 岡山秀吉著  
**最新趣味の厚紙建築**  
菊判全二冊 定價二・八〇 送料・一四

△本書は廣く支那學界の推移とその歸趣を論じ、支那近世四百  
年間に經る驚異的發展を促したる所以の動機を探討して之れを縱  
横に解剖し、各學風を説き、その著者に付いては極力  
微に入り細に入り、行方頗る平易な論旨とし、何人も容易にその  
しむるやうな努力をしてある。前人未踏の境地を開かれたる良書。  
△内容は第一編日本國民性史論(六章)、第二編國家及び國民性  
(七章)、第三編世界及び國民性(八章)の三部より第一章より成り、  
收むる所、本國代上性の研究を細叙し、明治以後現代に到る叙及  
び、國論を著者獨特の良書、又學校圖書館必備の好著也。愛國家  
育家及び學生必讀の良書、又學校圖書館必備の好著也。愛國家  
△植田陸軍中將曰く、「仰げ軍旗」は、軍旗が唯に軍隊の軍旗た  
るのみならず、我々の軍旗たることを國民に徹底せしめる好  
資料として敬意と謝意とを表す。……云々  
△國民精神の實に軍旗の指針である。唯、無二の文獻にして非常時  
一般國民の必興の指針である。敢て一本を薦む。軍隊、青年團及び  
△歩の木工より専門に近き範圍に及び小物・箱物・臺物・櫛  
物・卓子・腰掛類・建具の七編九十章三百四十二節に巨木  
十二圖二千餘個の詳圖と共に明快懇切に説き、木工教材の大  
成を爲せる大著である。小・中・師範學校等の手工科・工業科の  
教材として必要の好著、又專門家の木材工藝家等にも絶好の資料。  
▲科學的藝術的に立脚、有益多趣味なる手工資料! ▲實生活  
に活用ある建築的常識、有益多趣味なる手工資料! ▲實生活  
著者が手工作業に對し、有るべき設計の想像の供せ、各人の特色  
社會改善の代表的建築都市建設の模型を四百七十二個の挿圖に  
に有する代々の諸珍物の模範を諸學校手工科の必備書。  
快に説した無二の珍物の模範を諸學校手工科の必備書。

276  
592

